

(小委員会-個別協議、市町検討会、庁内連絡会議等を経て修正した個所を赤で表示)

# 三重県 都市計画基本方針

< 案 >

たたき台

# 目次

第1章	基本方針の趣旨	1
1	基本方針策定の目的と役割	1
2	基本方針の策定体制	1
3	基本方針の概要	2
第2章	三重県の都市づくりにおける課題整理	3
1	近年の全国的な社会情勢と三重県の状況	3
2	関連する諸計画、法整備等の動向	6
1)	国による上位・関連計画の見直し	6
2)	三重県における上位・関連計画	6
3)	法整備・制度改正	8
3	現行マスタープランの検証	9
1)	圏域の設定に関する検証	9
2)	都市計画区域の再編に関する検証	11
3)	都市づくりの方向に関する検証	12
4	現行マスタープランの検証から見えてきた課題の整理	33
1)	圏域の設定について	33
2)	都市計画区域の再編について	33
3)	都市づくりの方向について	33
第3章	三重県の都市計画の基本的な考え方	37
1	三重県の都市づくりの方向	37
2	三重県が目指す都市構造	39
1)	目指すべき都市構造の形成に向けた変革の観点	39
2)	特性に応じた集約型都市構造の形成に関する考え方	41
3	都市計画区域マスタープランについて	42
1)	計画の構成	42
2)	都市計画区域に関する考え方	43
3)	都市計画区域マスタープランの個別項目の考え方	45
I	都市計画の目標	45
II	区域区分に関する方針	45
III	主要な都市計画の決定方針	46

# 第1章 基本方針の趣旨

## 1 基本方針策定の目的と役割

三重県都市計画基本方針（以下「基本方針」という。）は、都市計画法第6条の2に基づき定める「都市計画区域の整備、開発及び保全の方針」（以下「都市計画区域マスタープラン」という。）の改定に先立ち、県全体における総合的、一体的観点から概ね共通する都市づくりの方向を示すものです。

今回策定する基本方針は、現行の都市計画区域マスタープラン（以下「現行マスタープラン」という。）の策定後における社会情勢の変化や国の施策の新たな展開、制度改正などに対応し、現行マスタープランの検証から明らかとなった課題を踏まえて策定するもので、平成32年（2020年）に改定時期を迎える都市計画区域マスタープランは、この基本方針に基づき改定されることとなります。また、県内各市町が市町マスタープランや立地適正化計画等を策定するにあたり、都市計画区域マスタープランを策定するまでの間、基本方針が活用されることを期待します。

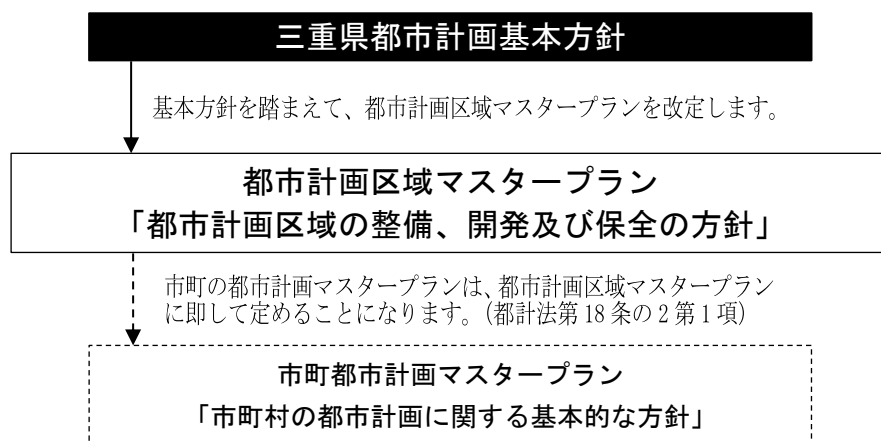


図 1-1 基本方針の位置付け

## 2 基本方針の策定体制

基本方針は、三重県都市計画審議会に小委員会を設け、事務局の案に対して、県の庁内連絡会議、県市町検討会及び関係機関と協議・調整し、住民意見を反映させながら、小委員会が予備審議したうえで、その報告から都市計画審議会が内容について適切であるか判断し、知事が審議会の答申を受けて決定します。

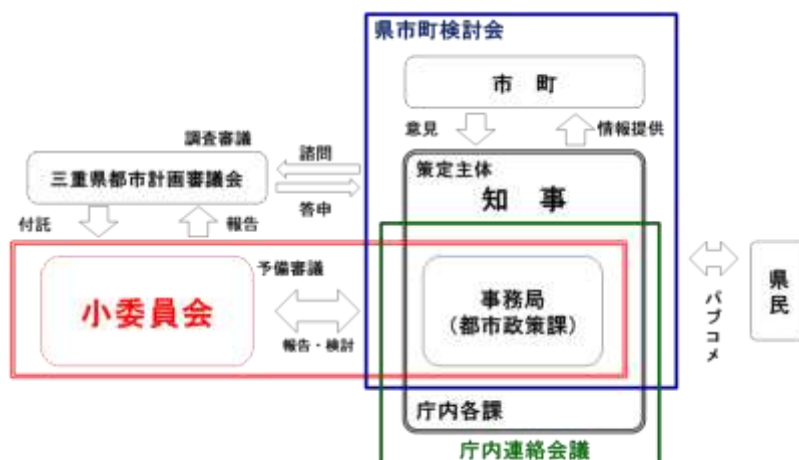


図 1-2 基本方針の策定体制

### 3 基本方針の概要

基本方針では、「第2章 三重県の都市づくりにおける課題整理」において、近年の社会情勢や国・県における諸計画等の方向性等を把握するとともに、現行マスタープランの検証を行い、三重県の都市づくりにおける課題を整理したうえで、「第3章 三重県の都市計画の基本的な考え方」において都市づくりの方向や目指すべき都市構造を示します。

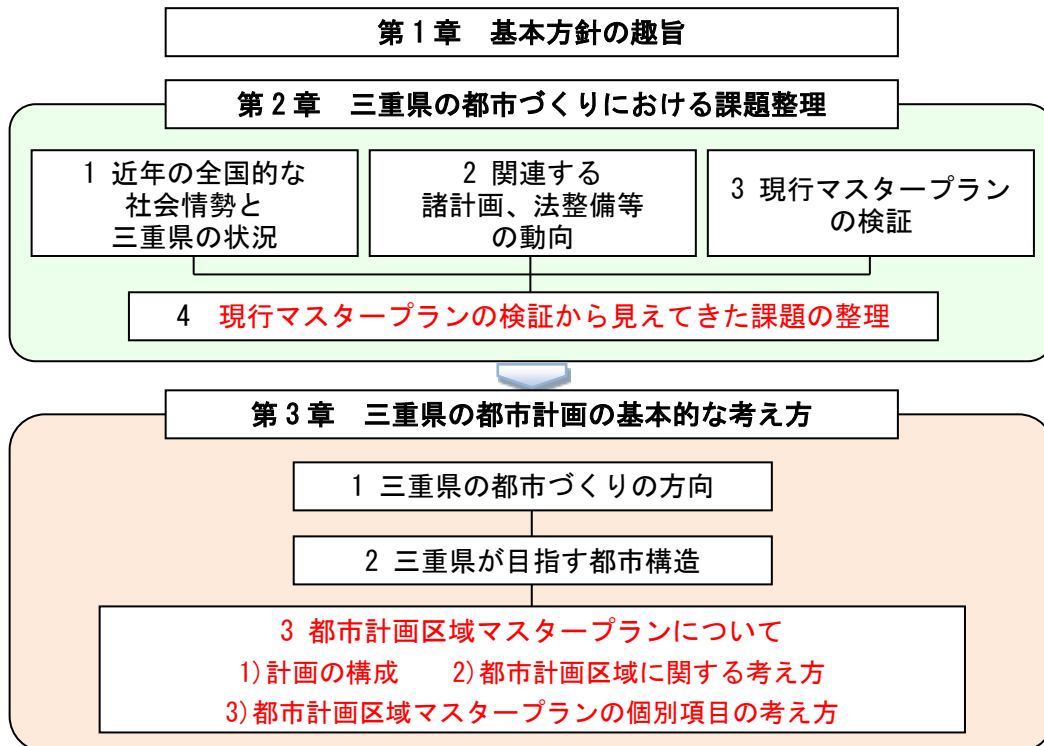


図 1-3 三重県都市計画基本方針の構成

## 第2章 三重県の都市づくりにおける課題整理

### 1 近年の全国的な社会情勢と三重県の状況

近年において全国的に**変化が生じている**主要な社会情勢と、それに関する三重県の状況を整理します。

#### ① 人口減少・少子高齢化の進展

##### 【全国的な社会情勢】

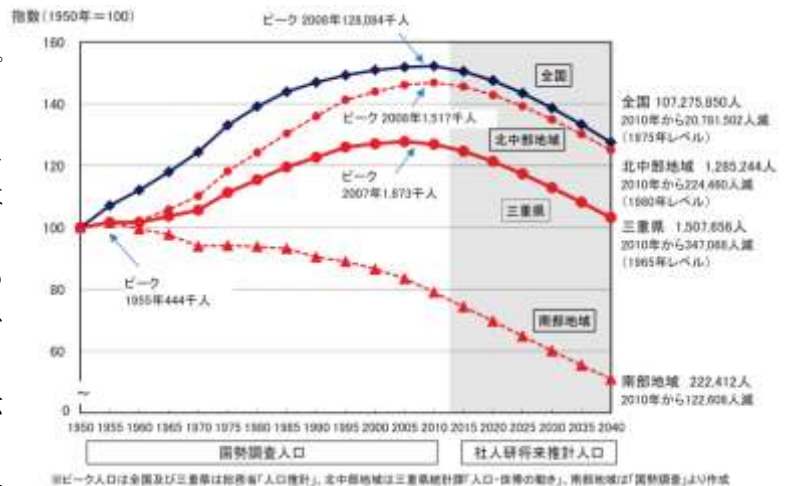
全国の地方都市では、急速な人口減少と少子高齢化の進展により地域の活力が低下しています。また、これまでの自動車を中心とした都市の形成により、住宅や店舗等の郊外化が進み、市街地が拡散しています。これらの現象が相まって、低密度な市街地が形成される状況となっており、今後、さらに人口減少と少子高齢化、**及びそのなかでの生産年齢人口の減少**が進むことにより、**地域活力のさらなる低下や地域コミュニティの維持が困難になることが懸念される**とともに、高齢者や子育て世代等が必要な都市サービスを楽しむことができなくなる可能性が出てきています。

一方で、都市機能や都市施設については、厳しい財政状況の下で、高度成長期に整備された道路などの社会資本の老朽化への対応も求められています。

##### 【三重県の状況】

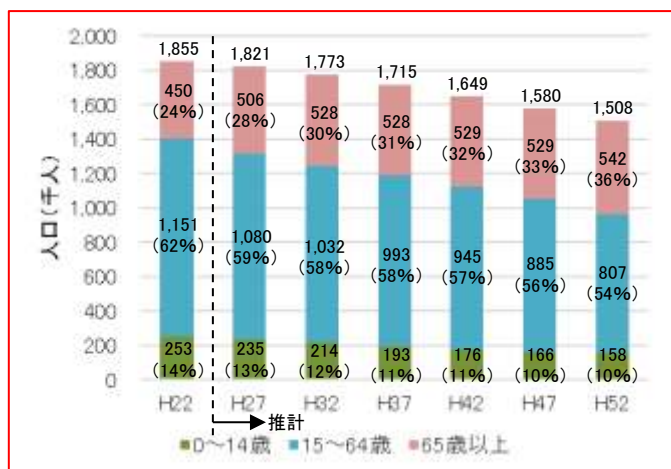
三重県では、平成19年(2007年)をピークに総人口の減少が始まっています。国立社会保障・人口問題研究所の推計によれば、平成52年(2040年)の総人口は昭和40年(1965年)と同程度になるとともに、人口の年齢構成には少子高齢化の影響が顕著に表れ、生産年齢人口の減少がさらに進展することが予測されています。今後、こうした人口の問題への対応策が一定の効果を挙げるとしても、人口減少・少子高齢化が相当な程度に進展することは避けられない状況となっており、**超高齢社会に対応していくことが必要になっています。**

このなかで、北勢圏域・中南勢圏域・伊賀圏域においては、人口集中地区(DID)や都市的土地利用の拡大傾向がみられる一方、DIDの人口密度は低下し、低密度な市街地が拡大している傾向があります。伊勢志摩圏域・東紀州圏域においては、DIDそのものの縮小がみられるとともに人口密度も低下しており、急速な人口減少が進んでいます。**また、県内において、空き家の戸数及び住宅総数に占める割合が増大する傾向にあります。人口減少に伴い、今後、こうした空き家や空き地が増加することが見込まれます。**



出典：三重県人口ビジョン（平成27年10月、三重県）

図2-1 三重県及び全国の5年ごとの人口及び将来推計人口の推移



出典：国勢調査及び社人研推計結果をもとに作成

図 三重県の将来人口（年齢3区分）の推計

## ② 大規模自然災害の発生

### 【全国的な社会情勢】

全国的に、大型の台風等による大量の降雨で大規模な土砂災害や浸水被害が発生するケースが増加しています。こうした極端な気象現象の増加には、地球温暖化が影響していると考えられています。また、南海トラフ地震をはじめとする大規模地震が発生する可能性が高まっていると指摘されています。

平成 26 年 8 月に発生した広島市北部における集中豪雨による土砂災害や、平成 27 年 9 月関東・東北豪雨に係る鬼怒川の洪水被害では大きな被害が発生しました。平成 23 年 3 月に発生した東日本大震災では、これまでの想定を遙かに超える津波による甚大な被害が発生しました。また、平成 28 年熊本地震では、断層の活動によって大きな揺れが連続し、大きな被害が生じています。こうした災害の経験・教訓を生かすことが求められています。

### 【三重県の状況】

三重県において、1 時間降水量 50 ミリ以上（非常に激しい雨）や同 80 ミリ以上（猛烈な雨）の年間観測回数は増加傾向にあり、土砂災害の発生回数も増加しています。平成 23 年の台風第 12 号による「紀伊半島大水害」では、県南部を中心に総降水量が各地で 1,000mm を超える大雨となり、土砂災害や浸水被害により、県内で 3 人の死者・行方不明者が生じました。

土砂災害に対する警戒避難体制強化を支援するため、県内の土砂災害危険箇所(16,208 箇所)における土砂災害警戒区域等の指定を進めており、平成 28 年 4 月時点の指定状況は約 4 割になっています。

表 2-1 三重県における土砂災害警戒区域等の指定状況（平成 28 年 4 月 22 日現在）

	土砂災害警戒区域		うち土砂災害特別警戒区域	
	指定数	指定率※	指定数	指定率※
三重県全体	6,331	39.1%	5,844	36.1%

※土砂災害危険箇所数に対する比率 出典：三重県防災砂防課資料をもとに作成

地震・津波に関して、政府の地震調査研究推進本部による長期評価（算定基準日：平成 28 年 1 月 1 日）では、南海トラフ地震（M8～M9 クラス）の発生確率は 30 年以内であれば 70%程度、50 年以内であれば 90%程度とされています。同じく地震調査研究推進本部による「全国地震動予測地図 2016 年版」では、今後 30 年間に震度 6 弱以上の揺れに見舞われる確率が右図のように示されており、三重県は沿岸部を中心に確率が比較的高くなっています。代表地点として示されている津市の確率は 62%であり、2014 年版からは 2 ポイント上昇しています。

また、三重県は全域が「南海トラフ地震防災対策推進地域」に指定され、川越町以南の沿岸部の市町が「南海トラフ地震津波避難対策特別強化地域」に指定されており、南海トラフ地震が発生した場合には、約 5.3 万人の人的被害（理論上最大クラス）など甚大な被害が想定されています。

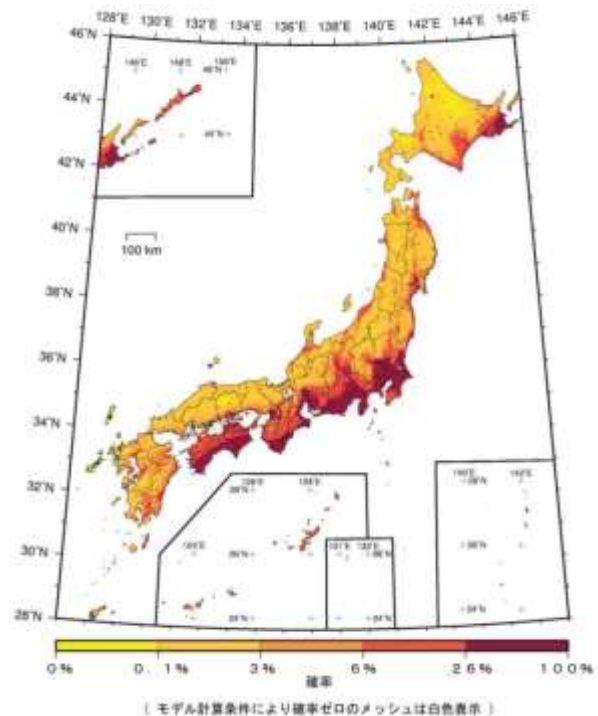


図 2-2 今後 30 年間に震度 6 弱以上の揺れに見舞われる確率（平均ケース・全地震）

出典：全国地震動予測地図 2016 年版（地震調査研究推進本部地震調査委員会）



### ③ 産業のグローバル化の進展

#### 【全国的な社会情勢】

グローバル化の進展により世界規模でのヒト、モノ、カネ、情報の動きが活発化し、産業分野における国際競争は一層激化しています。併せて、海外からの訪日観光需要が高まりをみせており、観光産業の発展が期待されています。こうした世界レベルの動きに対応しつつ、国内の各地域はそれぞれの強みを活かして競争力を高め、将来にわたって豊かな社会を維持していくことが求められています。

#### 【三重県の状況】

三重県は県内総生産に占める製造業の割合が高くなっています。これまで、昭和60年代以降に電気機械や輸送用機械等の工場を積極的に誘致するなど、産業構造の変化に対応してきました。2000年代初頭に液晶関連企業が多く立地したこともあって、製造業の総生産は平成19年度まで増加してきましたが、世界経済危機の影響により平成20年度に急減するなど、世界経済の変化に大きな影響を受けやすい産業構造になっています。今後の三重県における産業の方向性について、みえ産業振興戦略（平成28年3月）は、環境・エネルギー分野、ライフイノベーション分野の振興や、航空宇宙産業など今後高い成長が期待される分野への参入等を促進すること、本県の強みであるものづくり産業の維持・強化を図ること、観光関連産業や食関連産業とのサービス産業の成長を促すことを示し、また、再投資の促進や国内外からの企業誘致に取り組み、地域の雇用やイノベーションの創出を促進して地域経済の活性化につなげるとしています。

このような状況のなかで、三重県においては新名神をはじめとする高規格幹線道路の延伸やリニア中央新幹線など新しいインフラの概成が見込まれており、これらの地域経済への活用が期待されています。とくに、平成39年（2027年）に東京・名古屋間の開業が目標とされ、その後に大阪までの全線開業が予定されているリニア中央新幹線は、中部圏の発展の好機と期待されています。

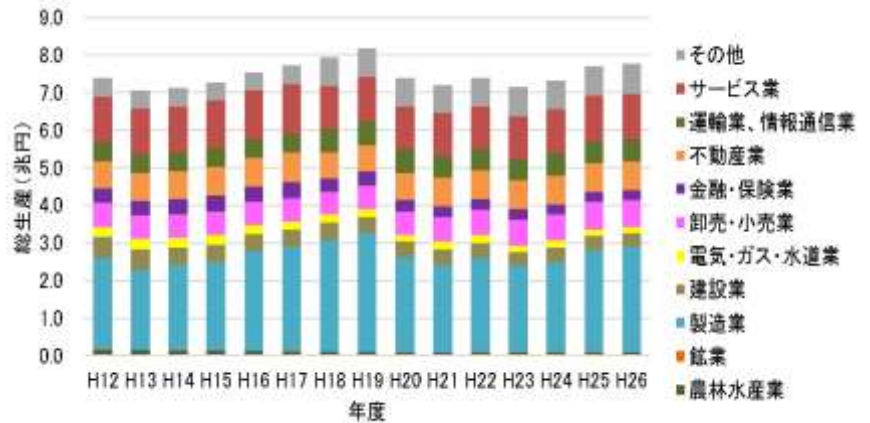


図 三重県における経済活動別県内総生産（名目）の推移  
※平成26年度は速報値。

出典：各年度の「県民経済計算」をもとに作成



図 三重県における主な広域交通網

出典：三重県総合交通ビジョン（平成27年3月、三重県）

## 2 関連する諸計画、法整備等の動向

基本方針を策定する背景となる上位・関連計画の見直しや、法整備・制度改正等についてポイントとなる事項を整理します。

### 1) 国による上位・関連計画の見直し

#### ① 国土のグランドデザイン 2050（平成 26 年 7 月 4 日公表）

本格的な人口減少社会の到来や、巨大災害の切迫性に対する危機意識を共有し、対流促進型国土の形成を目指すこととされ、その上では、「多様性と連携」を支え、地域の多様性をより豊かにする「コンパクト・プラス・ネットワーク」による国土・地域づくりが必要であり、また、国土づくりの大前提として、災害が発生しても人命を守り、致命的なダメージを受けない、災害に強い国土づくりが必要であるとされています。

#### ② 国土形成計画（全国計画：平成 27 年 8 月 14 日閣議決定）

「対流促進型国土」を国土の基本構想とし、これを形成するための重層的かつ強靱な「コンパクト+ネットワーク」を形成するとされています。

#### ③ 国土利用計画（全国計画：平成 27 年 8 月 14 日閣議決定）

「適切な国土管理を実現する国土利用」、「自然環境・美しい景観等を保全・再生・活用する国土利用」、「安全・安心を実現する国土利用」の 3 つを基本方針とし、国土の安全性を高め、持続可能で豊かな国土を形成する国土利用を目指すとしています。

#### ④ 社会資本整備重点計画（第 4 次）（平成 27 年 9 月 18 日閣議決定）

社会資本のストック効果を最大限に発揮するための戦略的インフラマネジメントを徹底するため、集約・再編を含めた既存施設の戦略的メンテナンス、既存施設の有効活用、社会資本の目的・役割に応じた選択と集中の徹底を図るとされています。

#### ⑤ 国土強靱化基本計画（平成 26 年 6 月 3 日閣議決定）

いかなる災害等の発生に対しても、「強さ」と「しなやかさ」を持った安全・安心な国土・地域・経済社会の構築に向けた「国土強靱化」を推進するとされています。

#### ⑥ まち・ひと・しごと創生総合戦略（平成 26 年 12 月 27 日閣議決定）

地方都市における都市のコンパクト化と公共交通網の再構築をはじめとする交通ネットワーク形成の推進など、暮らしの環境の充実を進め、活気にあふれる「まちの創生」を実現することにより、まち・ひと・しごと全体の好循環の実現を目指すとしています。

### 2) 三重県における上位・関連計画

#### ① みえ県民カビジョン（平成 24 年 4 月）、みえ県民カビジョン第二次行動計画（平成 28 年 4 月）

安全で快適な住まいまちづくり

【県民の皆さんとめざす姿】人口減少・超高齢社会に対応した集約型都市構造の形成（コンパクトなまちづくり）が進むとともに、都市基盤の整備や、安全で快適な住まいづくりが行われるなど、県民の皆さんと共に、住まいやまちづくりのことを考え、地域の個性を生かした魅力あるまちで、誰もが安心して、快適に暮らしています。



## ② 三重県国土利用計画（第四次）（平成 20 年 10 月）

### 地域類型「都市」の県土利用の基本方向

- ・ 中心市街地などにおける都市機能の集積やアクセシビリティの確保を推進しつつ、既成市街地においては、再開発などにより土地利用の高度化をはかるとともに、低未利用地の有効利用を促進する。市街化をはかべき区域においては、地域の合意をふまえ、計画的に良好な市街地などの整備をはかる。
- ・ 都市間の広域的な交通体系によって、効率的で、持続可能な土地利用をはかる。
- ・ 災害に対する安全性を高め、災害に強い都市構造の形成をはかるとともに、都市活動による環境への負荷が少ない都市の形成や、美しくゆとりある環境の形成をはかる。

## ③ 三重県国土強靱化地域計画（平成 27 年 7 月）

対象リスクを大規模自然災害と設定して三重県の脆弱性を評価し、「土砂災害危険箇所数が多いことを踏まえた土砂災害対策」等の取組方針を示しています。

## ④ 三重県人口ビジョン（平成 27 年 10 月）

三重県の人口は、このまま推移した場合には 2060 年に約 120 万人まで落ち込むこと、一方で、自然減対策と社会減対策を講じることで合計特殊出生率や転出超過数が改善された場合には、2060 年の時点で約 142 万人を確保できることが見込まれることを示しています。

## ⑤ 三重県まち・ひと・しごと創生総合戦略（平成 28 年 3 月改訂）

**コンパクトなまちづくりの推進**：都市における効果的な医療・福祉・子育て支援・商業等生活サービス提供のための都市機能の中心拠点への集約、持続的な生活サービスやコミュニティ確保のためのその周辺部等への居住の誘導を一体的に取り組み、交通ネットワークの形成と一体となったコンパクトなまちづくりを進めます。

## ⑥ みえ産業振興戦略（平成 28 年 3 月）

産業の高みをめざす戦略として、環境・エネルギー分野、ライフイノベーション分野の振興や、航空宇宙産業など今後高い成長が期待される分野への参入等を促進すること、本県の強みであるものづくり産業の維持・強化を図ること、観光関連産業や食関連産業とのサービス産業の成長を促すことを示し、また、再投資の促進や国内外からの企業誘致に取り組み、地域の雇用やイノベーションの創出を促進して地域経済の活性化につなげるとしています。

## ⑦ 三重県総合交通ビジョン（平成 27 年 3 月）

以下に示す 4 項目の基本方針を設定し、具体的な施策の実施方針を定めています。

- ・ まちづくりと連携した生活交通の再構築
- ・ 安全・安心を高めるための交通基盤づくりの推進
- ・ 広域交通ネットワーク機能の向上
- ・ 次世代を見据えた交通基盤の整備

## ⑧ 三重県景観計画（平成 19 年 12 月公表、平成 20 年 4 月発効、平成 27 年 1 月変更）、熊野川流域景観計画（平成 27 年 1 月公表、平成 27 年 4 月発効）

三重県景観計画：景観づくりの目標を示し、景観計画区域や区域内における良好な景観づくりに関する方針を定めるとともに、一定の行為に対する制限等を定めています。

熊野川流域景観計画：熊野川流域景観計画区域について、三重県景観計画の誘導方針を基本に、景観形成基準の追加や、届出が必要な行為の規模要件の下限の引き下げを行っています。

### ⑨ 三重県広域緑地計画（平成 23 年 7 月）

基本方針として、県土の骨格となるみどりと市街地外縁のみどりを保全すること、地域の歴史・文化を継承するみどりの保全と再生により、個性ある身近なみどりを保全・創出すること、市街地内の緑化を推進し、美しいまち並み景観の形成や憩いと潤いのある身近なみどりを創出すること、安全・安心な都市づくりに寄与するみどりを創出すること、多様な主体によるみどりの保全・創出とマネジメントによるみどりの機能向上を図ることを示しています。

## 3) 法整備・制度改正

### ① 都市再生特別措置法の改正（平成 26 年 8 月施行）

「コンパクトシティ・プラス・ネットワーク」の考えにより持続可能な都市構造を構築することを目的とする「立地適正化計画」を、市町村が策定することができることになりました。

### ② 津波防災地域づくりに関する法律の制定（平成 23 年 12 月施行）

最大クラスの津波が発生した場合でも「何としても人命を守る」という考え方で、ハード・ソフトの施策を柔軟に組み合わせる「多重防御」の発想により、地域活性化の観点も含めた総合的な地域づくりの中で津波防災を推進することとされました。

### ③ 土砂災害警戒区域等における土砂災害防止対策の推進に関する法律の改正（平成 23 年 5 月施行、平成 27 年 1 月施行）

平成 23 年 5 月施行の改正では、大規模な土砂災害が急迫している場合に国又は県が緊急調査を行い、土砂災害緊急情報を関係市町村へ通知するとともに一般に周知することになりました。

平成 27 年 1 月施行の改正では、土砂災害警戒区域等の指定促進のため、都道府県に基礎調査の結果の公表を義務づけるとともに、都道府県知事に対し、土砂災害警戒情報の関係市町村の長への通知及び一般への周知が義務づけられました。

### ④ 洪水浸水想定区域等に関する水防法及び施行規則の改正（平成 27 年 7 月施行）

国及び県は、想定しうる最大規模の降雨・高潮を前提として、洪水浸水想定区域、雨水出水浸水想定区域、高潮浸水想定区域を設定し、公表することになりました。また、洪水時家屋倒壊危険ゾーン（家屋倒壊等氾濫想定区域）を併せて市町に情報提供することになりました。

### ⑤ 都市農業振興基本法の制定（平成 27 年 4 月施行）と都市農業振興基本計画の策定（平成 28 年 5 月）

これまで宅地や公共施設の予定地等としてみなされてきた都市農地の位置づけを、「あって当たり前なもの」、さらには「あるべきもの」へと大きく転換し、環境共生型の都市を形成する上で農地を重要な役割を果たすものとして捉えることが必要であるとされました。法に基づき、国と地方公共団体は都市農業の振興に関する施策を総合的に策定・実施する責務を有するとされ、また、政府は必要な法制上、財政上、税制上、金融上の措置を講じることになっています。

### 3 現行マスタープランの検証

#### 1) 圏域の設定に関する検証

現行マスタープランは、都市計画法で規定されている都市計画区域ごとのマスタープランに加え、一定のまとまりのある圏域ごとの「圏域マスタープラン」を策定して都市計画の目標・方針を定めています。

これは、自動車を中心とした都市の形成やライフスタイル多様化による活動範囲の広域化、高規格道路ネットワーク整備の推進に伴う産業活動の広域化、及び市町村合併による行政区域の拡大もあり、都市計画区域を越える活動や都市計画区域と行政区域の不整合があることから、個別の都市計画区域内だけをみていると、広域的な視点からの都市の将来像をわかりやすく提示することが困難であるためです。そこで、関連の深い複数の都市計画区域を一括し、圏域マスタープランにおいて都市計画区域外も含めた圏域全体の将来像を示したうえで、都市計画区域マスタープランにおいて都市計画区域内での主要な都市計画の方針を示しています。

この圏域について、現行マスタープランでは、上位・関連計画等による圏域の考え方や生活上の結びつきを考慮し、市町の区域を単位として5つに区分しています。

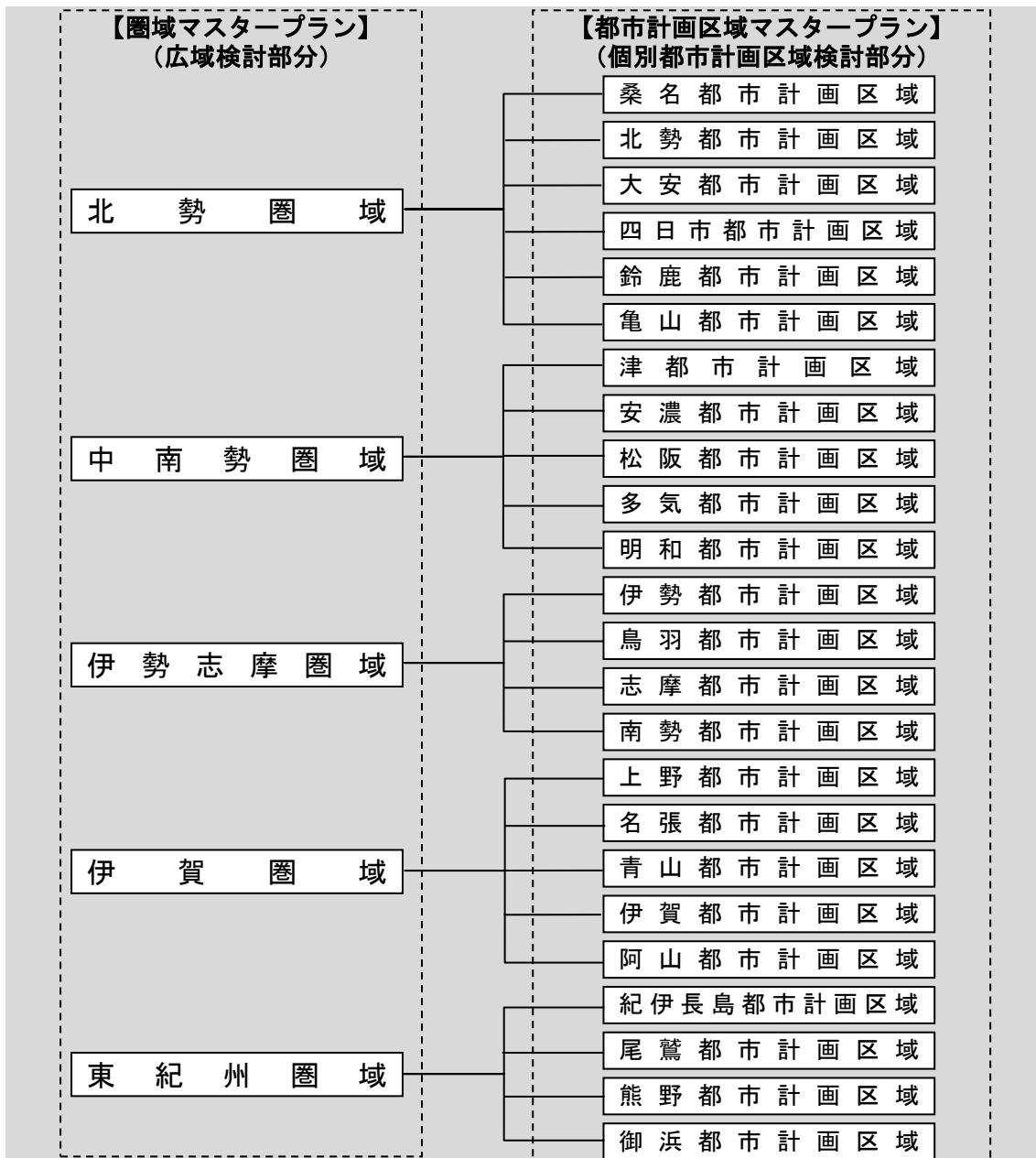


図 2-6 現行マスタープラン体系図

現行マスタープランで設定している5つの圏域の区分について、策定後の変化を踏まえ、下記(1)～(5)の項目により妥当性の検証を行いました。次頁にその概要を示します。

- (1) 地形等の自然的条件
- (2) 土地利用の状況及び見通し
- (3) 通勤・通学等の日常生活圏
  - ① 通勤・通学
  - ② 買い物動向
  - ③ 保健医療圏
- (4) 主要な交通施設の配置状況
- (5) 上位・関連計画

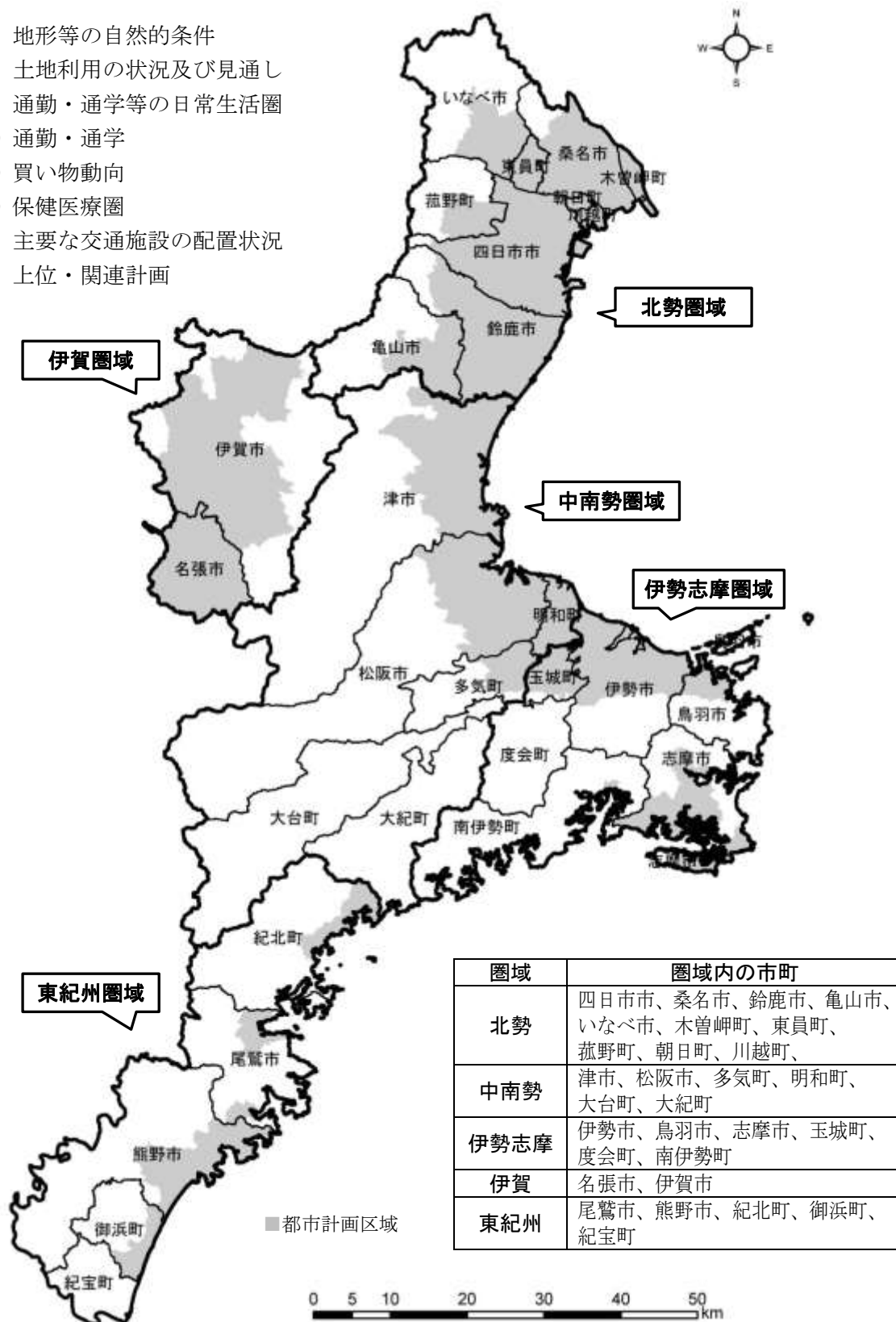


図 2-7 現行マスタープランの圏域区分図

## ■圏域設定の検証（概要）

圏域設定の検証についてその概要を以下に示します。検証の結果、ある一定の圏域を形成している状況に大きな変化は見られず、項目ごとに差異はあるものの圏域が形成されている状況が確認されました。一部の圏域においては、若干の流動や生活圏域設定が異なることがありますが、現行の区分を変更する必要があるほどではないと考えられます。

項目		概要
(1) 地形等の自然的条件		・三重県の地形は、県のほぼ中央を東西に横断する中央構造線によって、大きく北側と南側に分かれます。
(2) 土地利用の状況及び見通し		・上記の地形条件の中、都市的な土地利用は伊勢湾沿岸及び上野盆地（伊賀盆地）にまとまっているほか、熊野灘沿岸等に分散しています。
(3) 日常生活圏	①通勤・通学	・平成 22 年国勢調査の結果によると、市町村合併の結果として前回調査時点では市町村間移動であったものが自市町内移動になった他には顕著な変化はありません。北勢と中南勢、及び中南勢と伊勢志摩の間にはそれぞれに通勤・通学による比較的大きな人の流動がみられますが、以前からあるもので、圏域間の通勤通学率は平成 17 年時点と概ね同じです。
	②買い物動向	・「買物調査報告書（平成 23 年 3 月）」によると、生鮮食品や日用品雑貨等の日常的な買い物行動は、現行の圏域内で概ね行われています。 ・高級衣料品等に関する買い物行動は、名古屋市や大阪、和歌山方面など県外を含めて広域化します。ただし、県内での市町間の流出入は、一部を除いて概ね現行圏域内で生じています。
	③保健医療圏	・三重県保健医療計画（第 5 次改訂）で設定されている保健医療圏は、前回設定時点と同じです。
(4) 主要な交通施設の配置状況		・平成 20 年以降でみると、新名神高速道路（平成 20 年）、近畿自動車道紀勢線の一部（平成 21～26 年）、熊野尾鷲道路（平成 20 年、平成 25 年）の供用が開始されました。従来からの交通軸をより強化するものであり、現行の圏域内外での人・モノの流れが一層促進されることが期待されます。
(5) 上位・関連計画		・現行の圏域設定は、三重県国土利用計画（第四次）（平成 20 年 10 月）及び三重県景観計画（平成 19 年 12 月 4 日公表）での地域区分と大紀町の扱いのみが異なっています。主要交通施設の配置状況等を踏まえると、都市的な観点からのまとめりとしては、現行の圏域設定は妥当であると考えられます。

## 2) 都市計画区域の再編に関する検証

市町村合併の進展により、平成 15 年 11 月末時点で 69 あった三重県内の市町村は 29 に再編され、その結果、一つの市が複数の都市計画区域を有するケースが生じることになりました。

現行マスタープランの策定に向けた「三重県都市マスタープラン改定基本方針」（平成 20 年 7 月）では、各市町における合併後の一体的なまちづくりの観点から「1 市町は同一の都市計画区域」とすることを基本方針としました。ただし、これと同時に、自然的・社会的条件を踏まえ、合併後においても地域ごとに目指すべき複数の都市像を掲げてまちづくりを進める場合には、その方針に合わせて「1 市町に複数の都市計画区域」もあり得るとしていました。



表 平成 20 年 7 月「三重県都市マスタープラン改定基本方針」の時点での  
三重県における合併の状況と都市計画区域の関係

合併スタイル	線引き都市計画	非線引き都市計画	都市計画区域外
①同じ都市計画区域内での合併	桑名市（桑名）、 四日市（四日市）	亀山市（亀山）、 伊勢市（伊勢）	
②非線引き都市計画区域間の合併		<u>志摩市</u> ( <u>浜島・大王・志摩</u> )	
③都市計画区域外間の合併			大紀町、紀宝町、 大台町
④非線引き都市計画区域 ＋都市計画区域外の合併		熊野市（熊野）、南伊勢町（南勢）、 紀北町（紀伊長島）、多気町（多気）	
⑤線引き都市計画区域 ＋非線引き都市計画区域 ＋都市計画区域外の合併	<u>いなべ市（桑名・大安・北勢）、津市（津・亀山・安濃）、 松阪市（松阪・嬉野・三雲）、伊賀市（上野・青山・伊賀・阿山）</u>		

※（ ）内は都市計画区域名、下線は合併により 1 市に複数の都市計画区域をもつことになった自治体

検討の結果、松阪市及び志摩市について、都市計画区域の再編を実施しました。

一方、津市及びいなべ市については、当面は複数の区域を存続させてまちづくりを進めていくこととしました。また、伊賀市においては、区域再編に向けた検討を進めているところです。

表 都市計画区域の再編の実施状況

時期	対象の市町	概要
平成 23 年 9 月	志摩市	浜島都市計画区域、大王都市計画区域、志摩都市計画区域を統合し、志摩都市計画区域とした。
平成 24 年 5 月	松阪市	松阪都市計画区域、嬉野都市計画区域、三雲都市計画区域を統合し、松阪都市計画区域とした。旧三雲都市計画区域は区域区分の変更により「非線引き」から「線引き」となり、新規に用途地域を指定した。

### 3) 都市づくりの方向に関する検証

現行マスタープランでは、5つの都市づくりの方向と、11の施策の柱を位置づけています。これらの達成状況等について検証を行います。

表 2-2 現行マスタープランで設定している都市づくりの方向及び施策の柱

都市づくりの方向	施策の柱
美しく魅力と個性にあふれる地域づくり	○緑豊かな都市づくり ○歴史・文化を活かした都市づくり ○美しい景観づくり
持続可能な地域づくり	○地域の特性に応じた集約型都市構造の構築 ○環境負荷の少ない都市づくり ○人が集まり交流する空間の形成
安全で快適な生活環境の創造	○安全・安心な都市の構築 ○快適な生活環境づくり
地域活力の維持・向上	○広域道路ネットワーク等を活かした産業集積 ○個性を生かした集客交流の推進
県民が主役の地域づくり	○県民との協働による都市づくり

① 美しく魅力と個性にあふれる地域づくり

a. 緑豊かな都市づくり

平成 21 年度末における都市公園の整備状況は約 1,749ha で、平成 18 年度末 (1,435ha) と比較すると約 314ha 増加しています。都市計画区域内人口一人当たりの供用開始済みの面積は 10.65 m<sup>2</sup>/人で、都市公園法施行令で定められた住民一人当たりの都市公園の敷地面積の標準 (10 m<sup>2</sup>/人以上) を概ね満たしている状況にあります。

ただし、圏域別にみると、北勢圏域・東紀州圏域では 10 m<sup>2</sup>/人以上である一方、その他の圏域では 5~8 m<sup>2</sup>/人になっています。

表 2-3 都市公園の区分別面積と一人当りの公園面積率 (圏域別)

圏域	都市公園面積(ha)										一人当たり公園面積(m <sup>2</sup> /人)
	広域公園	風致公園	特殊公園	運動公園	総合公園	地区公園	近隣公園	街区公園	緑地・墓園	合計	
北勢圏域	31.80	0.00	0.00	40.28	216.74	44.34	40.95	57.84	715.82	1,147.77	14.19
中南勢圏域	0.00	0.00	0.00	46.02	56.18	30.15	18.10	15.34	50.40	216.19	5.14
伊勢志摩圏域	0.00	0.62	7.78	28.34	92.32	9.00	8.50	10.37	10.00	166.93	8.39
伊賀圏域	0.00	0.00	0.00	10.80	48.29	12.26	14.02	7.41	24.60	117.18	7.04
東紀州圏域	54.36	0.00	0.00	12.80	16.90	4.20	12.10	0.69	0.00	101.05	21.15
三重県計	86.16	0.62	7.78	138.04	430.43	99.95	93.67	91.65	800.82	1,749.12	10.65

資料：都市計画基礎調査

b. 歴史・文化を活かした都市づくり c. 美しい景観づくり

景観法に基づく「三重県景観計画」を策定し、平成 20 年 4 月から運用を開始しました。また、「熊野川流域景観計画」を策定し、平成 27 年 4 月から運用を開始しました。県は、地域や市町の自主性・自立性を尊重し、役割分担を踏まえつつ、市町の景観づくりを支援・補完するとともに、広域的な視野に立った景観づくりに関する施策を実施していくこととしています。なお、県内 29 市町のうち、9 市 (平成 28 年 6 月現在：津市、四日市市、伊勢市、松阪市、桑名市、鈴鹿市、亀山市、志摩市、伊賀市) がそれぞれの**地域の実情に応じた景観計画を策定・運用**しています。

また、「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」に基づく歴史的風致維持向上計画 (通称：歴史まちづくり計画) は、県内において亀山市 (平成 21 年 1 月認定)、明和町 (平成 24 年 6 月認定)、伊賀市 (平成 28 年 5 月認定) の 3 市町が認定を受けています。

この他、三重県屋外広告物条例に基づく屋外広告物沿道景観地区が県内 8 地区で指定されており、沿道景観に配慮した屋外広告物の規制がなされています。

② 持続可能な地域づくり

a. 地域の特性に応じた集約型都市構造の構築 b. 環境負荷の少ない都市づくり

持続可能な地域づくりに向け、多様な拠点 (広域拠点や地域拠点等。広域拠点及び地域拠点の一覧は表 2-14 参照。) を形成・配置し、各拠点が相互に連携する集約型都市構造の構築を目指したまちづくりを進めてきました。

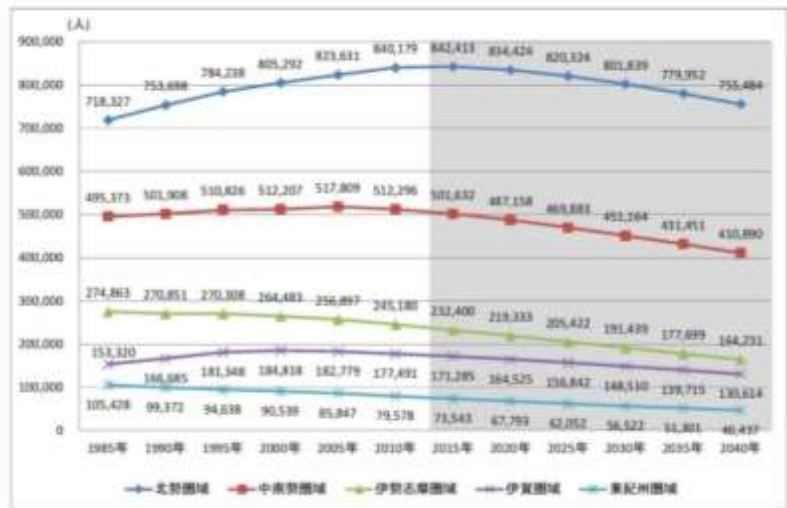
このなかで、都市構造に大きな影響を及ぼす大規模集客施設の新規立地については、原則として広域拠点 (集積型) においてのみ許容することとしており、**この方針に沿うかたちで、伊勢市及び多気町では特別用途地区が指定されています。**また、市街地外での市街化抑制の方針に沿って、伊勢市及び明和町において非線引き用途未指定区域の全域が特定用途制限地域に指定されるといった取組が行われています。

なお、市町村合併を踏まえた一体的なまちづくりの観点からの都市計画区域再編の基本的方針に基づき、志摩都市計画区域及び松阪都市計画区域について再編を実施しています。

以下に、都市構造の現状について検証します。

【人口の推移と分布】

三重県の各圏域の人口は、北勢圏域は平成 27 年（2015 年）、中南勢圏域は平成 17 年（2005 年）、伊賀圏域は平成 12 年（2000 年）をそれぞれピークにして、また、伊勢志摩圏域及び東紀州圏域は継続的に人口が減少していくと推計されています。



出典：国勢調査及び社人研推計結果をもとに作成

図 2-8 圏域別人口の推移及び将来推計

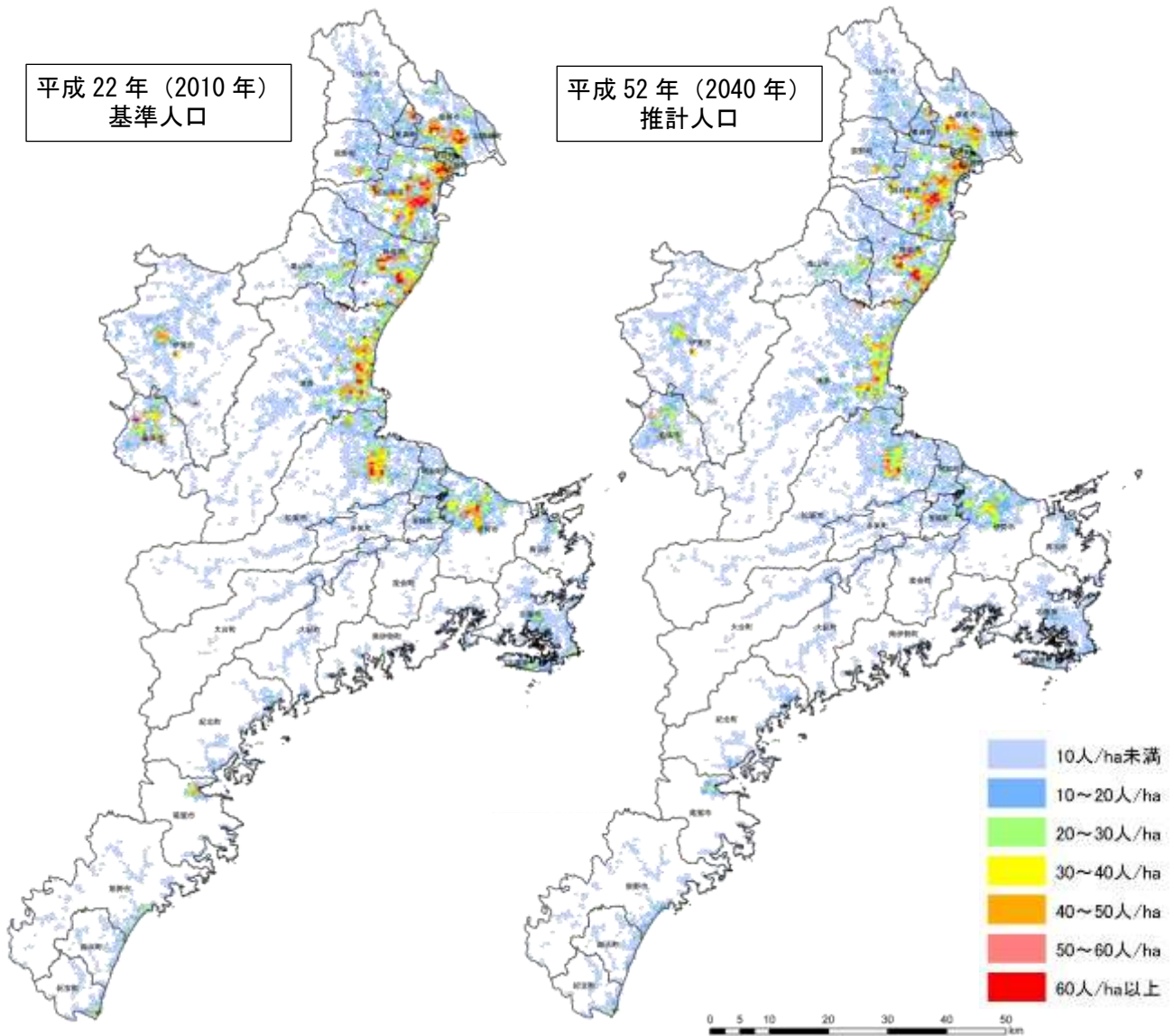
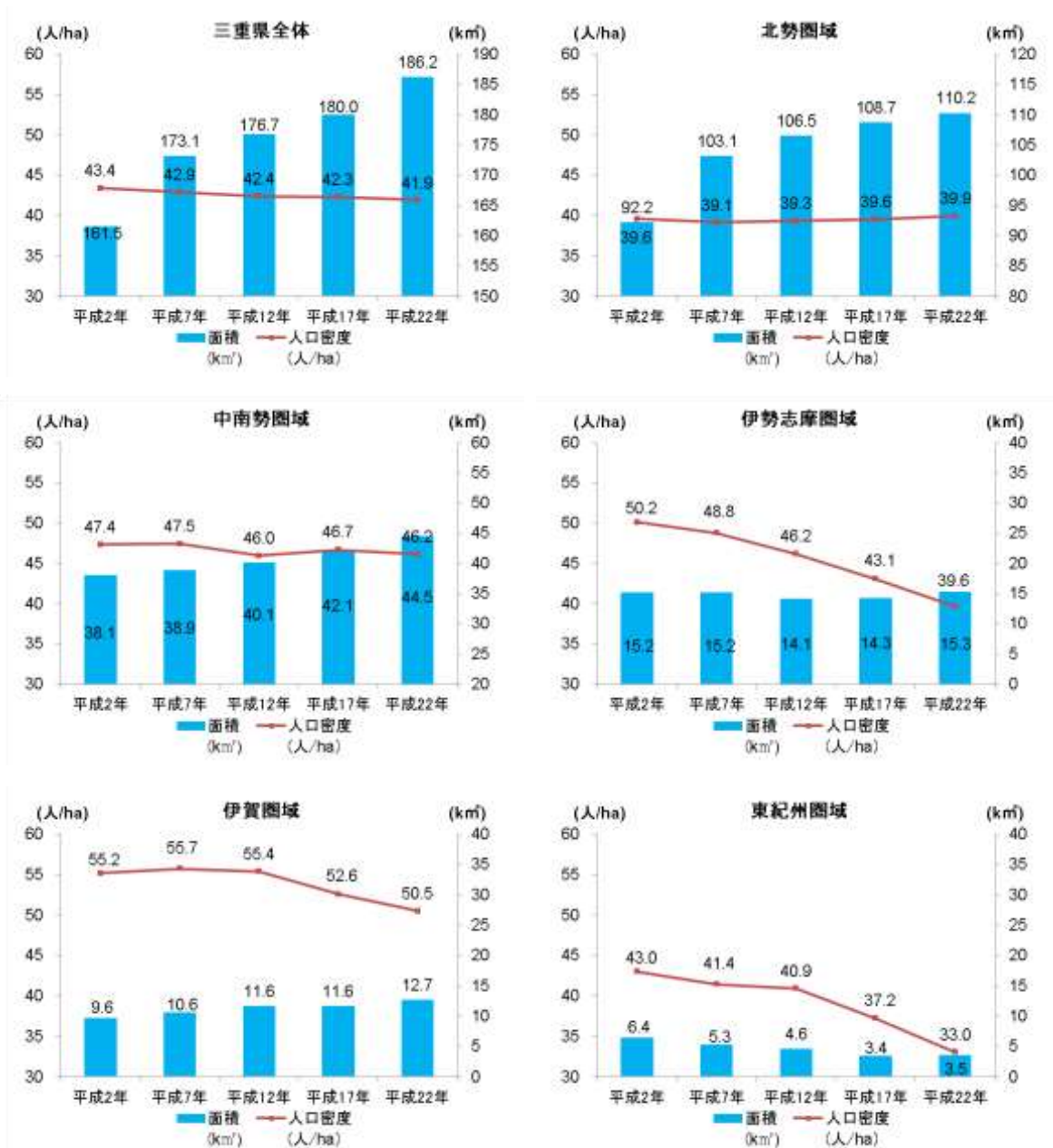


図 2-9 人口分布の現状と将来予測（500m メッシュ）

### 【人口集中地区(DID)の状況】

三重県における人口集中地区（DID）は、全体としては面積及び人口ともに増加傾向にあります。ただし DID 内人口密度は低下傾向にあるとともに、平成 22 年時点で 41.9 人/ha であり高くはない状況です。

圏域別にみると、面積は北勢・中南勢・伊賀圏域では拡大し、伊勢志摩圏域では横ばいであり、東紀州圏域では減少しています。DID 内人口密度については、北勢圏域では概ね密度を維持しているものの約 40 人/ha で高くはなく、中南勢圏域では概ね 46～47 人/ha で横ばいからやや低下傾向にあります。伊賀圏域の DID 内人口密度は比較的高く 50 人/ha 以上になっています（地形的要因によると考えられます）が、近年は低下傾向にあります。伊勢志摩圏域及び東紀州圏域の DID 内人口密度は大きく低下しつつあり、また、これら圏域では DID が消滅している地区があります。



出典：国勢調査をもとに作成

図 2-10 圏域別の DID 面積及び DID 内人口密度



【拠点区域への人口・施設の集積状況】

現行マスタープランで位置づけられている広域拠点及び地域拠点の区域には、県総人口の約1/4の人口が居住しています。また、県内の主要な公共公益施設の約3割が同区域内に立地しています。北勢圏域の拠点区域の人口は、概ね周辺より増加する傾向にありますが、今後は減少傾向になると予測されます。中南勢圏域では、全体として人口減少傾向にあるなかで、市街地周辺に位置する拠点区域の人口は直近で増加傾向にあり、将来的にも減少が比較的小さいと予測されます。伊勢志摩圏域では拠点区域での人口減少傾向がより大きくなっています。

※拠点区域：広域拠点については中心となる鉄道駅等の施設から半径1kmの範囲を、地域拠点については中心となる施設から半径800m（徒歩圏を想定）の範囲とします。

※主要な公共公益施設：二次救急指定等の主要な医療施設、福祉施設、児童福祉施設、文化体育施設、コミュニティ施設、教育施設、市役所・町役場、国・県の機関、警察署、消防署及び郵便局の合計数とします。

なお、機能を単位に集計しています。（資料：国土数値情報（国土交通省）、保健医療計画（第5次改訂）（平成25年3月、三重県））

表 2-6 拠点区域内の人口（メッシュ集計による概数）

	平成17年					平成22年				
	総人口	拠点区域人口(概数)				総人口	拠点区域人口(概数)			
		広域拠点 (集積型)	広域拠点 (維持型)	地域拠点	合計 ※重複除く		広域拠点 (集積型)	広域拠点 (維持型)	地域拠点	合計 ※重複除く
北勢	823,631	51,000	96,100	52,000	197,100	840,179	52,500	98,200	53,900	202,700
中南勢	517,809	55,500	32,600	54,100	132,200	512,296	55,100	31,700	54,900	131,500
伊勢志摩	256,897	26,700	-	36,200	62,100	245,180	24,900	-	34,400	58,500
伊賀	182,779	29,500	-	4,800	34,300	177,491	29,600	-	4,800	34,400
東紀州	85,847	15,100	-	11,200	26,300	79,578	14,000	-	10,500	24,500
合計	1,866,963	177,700	128,700	158,300	452,000	1,854,724	176,000	129,900	158,600	451,600

	平成32年 ※推計値				
	総人口	拠点区域人口(概数)			
		広域拠点 (集積型)	広域拠点 (維持型)	地域拠点	合計 ※重複除く
北勢	834,424	51,000	97,600	54,800	201,600
中南勢	487,158	52,200	30,400	52,500	125,600
伊勢志摩	219,333	22,000	-	30,600	52,000
伊賀	164,525	27,500	-	4,300	31,800
東紀州	67,793	11,900	-	9,400	21,400
合計	1,773,233	164,700	128,000	151,600	432,400

	平成17年→平成22年 増減率					平成22年→平成32年 増減率				
	総人口	拠点区域人口				総人口	拠点区域人口			
		広域拠点 (集積型)	広域拠点 (維持型)	地域拠点	合計 ※重複除く		広域拠点 (集積型)	広域拠点 (維持型)	地域拠点	合計 ※重複除く
北勢	2.0%	3.0%	2.2%	3.7%	2.8%	-0.7%	-2.8%	-0.6%	1.7%	-0.5%
中南勢	-1.1%	-0.7%	-2.9%	1.5%	-0.5%	-4.9%	-5.1%	-4.0%	-4.3%	-4.5%
伊勢志摩	-4.6%	-7.0%	-	-5.0%	-5.7%	-10.5%	-11.4%	-	-11.1%	-11.1%
伊賀	-2.9%	0.4%	-	-0.2%	0.3%	-7.3%	-7.1%	-	-11.3%	-7.7%
東紀州	-7.3%	-7.6%	-	-6.3%	-7.1%	-14.8%	-14.6%	-	-10.4%	-12.8%
合計	-0.7%	-1.0%	0.9%	0.1%	-0.1%	-4.4%	-6.4%	-1.4%	-4.4%	-4.3%

※図 2-9 に示すメッシュデータを集計した。

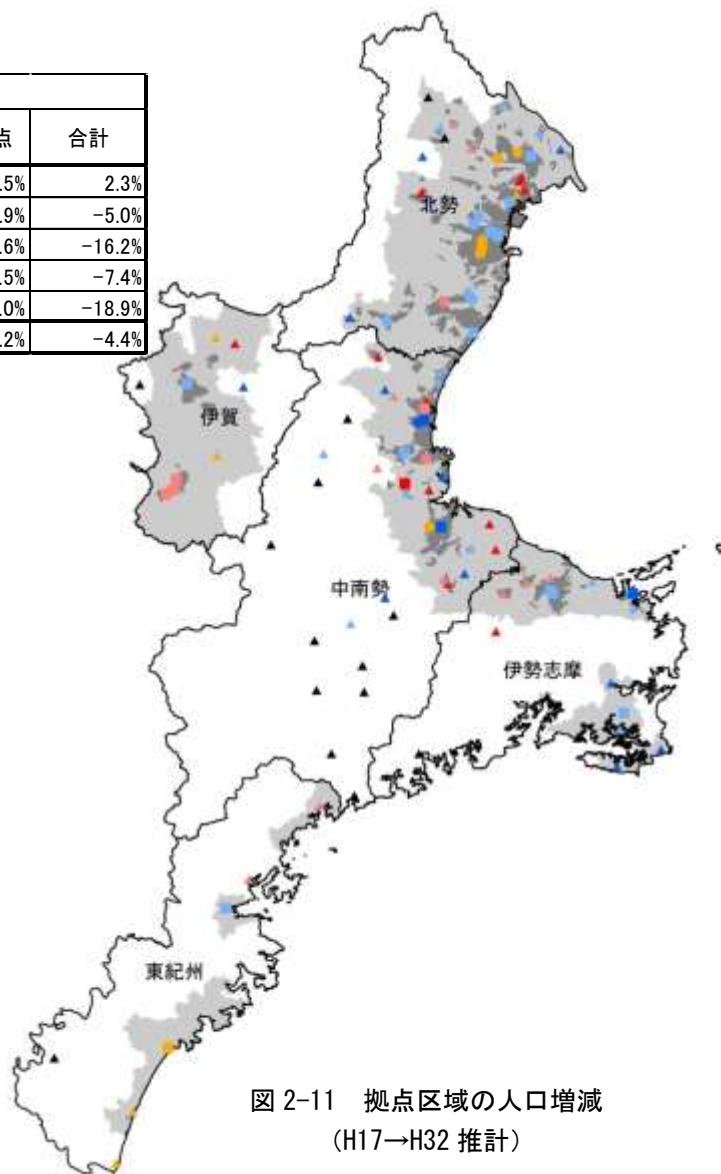
表 2-7 拠点区域内の居住人口・立地主要施設の比率（各圏域総数に対する比率）

	合計	北勢	中南勢	伊勢志摩	伊賀	東紀州
人口(平成22年)	24%	24%	26%	24%	19%	31%
主要公共公益施設	31%	30%	34%	32%	29%	27%

※人口は図 2-9 に示すメッシュデータを集計し、施設は GIS 上で施設数を集計した。



H17→32 増減率	総人口	拠点区域人口			
		広域拠点 (集積型)	広域拠点 (維持型)	地域拠点	合計
北勢	1.3%	0.1%	1.6%	5.5%	2.3%
中南勢	-5.9%	-5.8%	-6.8%	-2.9%	-5.0%
伊勢志摩	-14.6%	-17.6%		-15.6%	-16.2%
伊賀	-10.0%	-6.7%		-11.5%	-7.4%
東紀州	-21.0%	-21.1%		-16.0%	-18.9%
合計	-5.0%	-7.3%	-0.5%	-4.2%	-4.4%



■ 都市計画区域  
 ■ 市街化区域又は用途地域  
 現行都市 MP による拠点  
 □ 広域拠点 (集積型)  
 ○ 広域拠点 (維持型)  
 △ 地域拠点  
 H17→H32 人口増減率 (%) の  
 各圏域平均値との差異  
 ■ 10ポイント以上小さい  
 ■ 5~10ポイント小さい  
 ■ 0~5ポイント小さい  
 ■ 0~5ポイント大きい  
 ■ 5~10ポイント大きい  
 ■ 10ポイント以上大きい

図 2-11 拠点区域の人口増減 (H17→H32 推計)

【大規模小売店舗の新規立地状況】

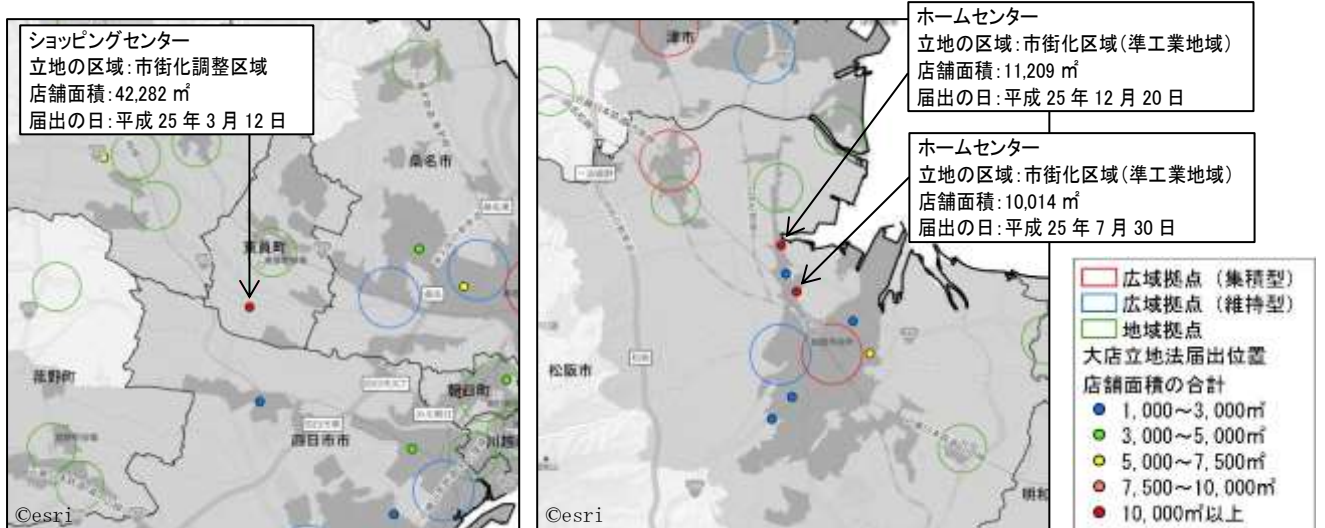
三重県において、平成 22 年度から平成 27 年度の間、大規模小売店舗立地法の規定による大規模小売店舗（店舗面積 1,000 m<sup>2</sup>超）の新設の届出は 51 件がなされています。その位置を現行マスタープランの拠点区域の内外別に集計すると下記ようになります。これをみると、全体では届出件数の概ね 7 割、圏域別には少なくとも 6 割以上の大規模店舗は拠点の区域外に立地しており、拠点区域においてこれら店舗の集積が進んでいる状況にはありません。

表 2-8 大規模小売店舗の新設の届出位置 (平成 22~27 年度)

件数	届出総数	広域拠点		地域拠点	拠点区域外	比率	届出総数	広域拠点		地域拠点	拠点区域外
		集積型	維持型					集積型	維持型		
北勢	20	1	5	2	12	北勢	100%	5%	25%	10%	60%
中南勢	18			3	15	中南勢	100%			17%	83%
伊勢志摩	8			2	6	伊勢志摩	100%			25%	75%
伊賀	3	1			2	伊賀	100%	33%			67%
東紀州	2				2	東紀州	100%				100%
合計	51	2	5	7	37	合計	100%	4%	10%	14%	73%

出典：三重県公報をもとに作成

また、大規模集客施設（店舗、飲食店、展示場、遊技場等）に供する建築物で当該用途の床面積の合計が1万㎡を超えるもの）の新規立地は広域拠点（集積型）においてのみ許容する方針としてきたところですが、大規模小売店舗のうち店舗面積が10,000㎡を超えるものが広域拠点の区域外に立地している例もあり、この方針が必ずしも守られてはいない状況にあります。



出典：三重県公報をもとに作成

図 2-12 店舗面積の規模別の大規模小売店舗の新設の届出位置（平成 22～27 年度）

【主要な交通施設】

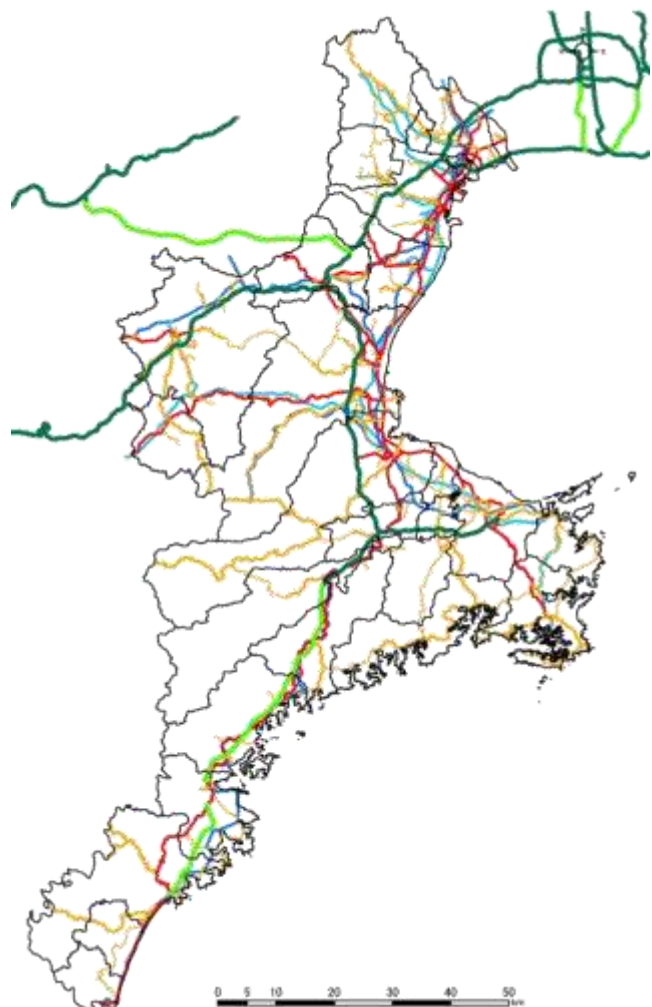
平成 20 年以降では、新名神高速道路（平成 20 年）、近畿自動車道紀勢線（平成 21～26 年）、熊野尾鷲道路（平成 20 年、25 年）の供用が開始されています。



【資料】

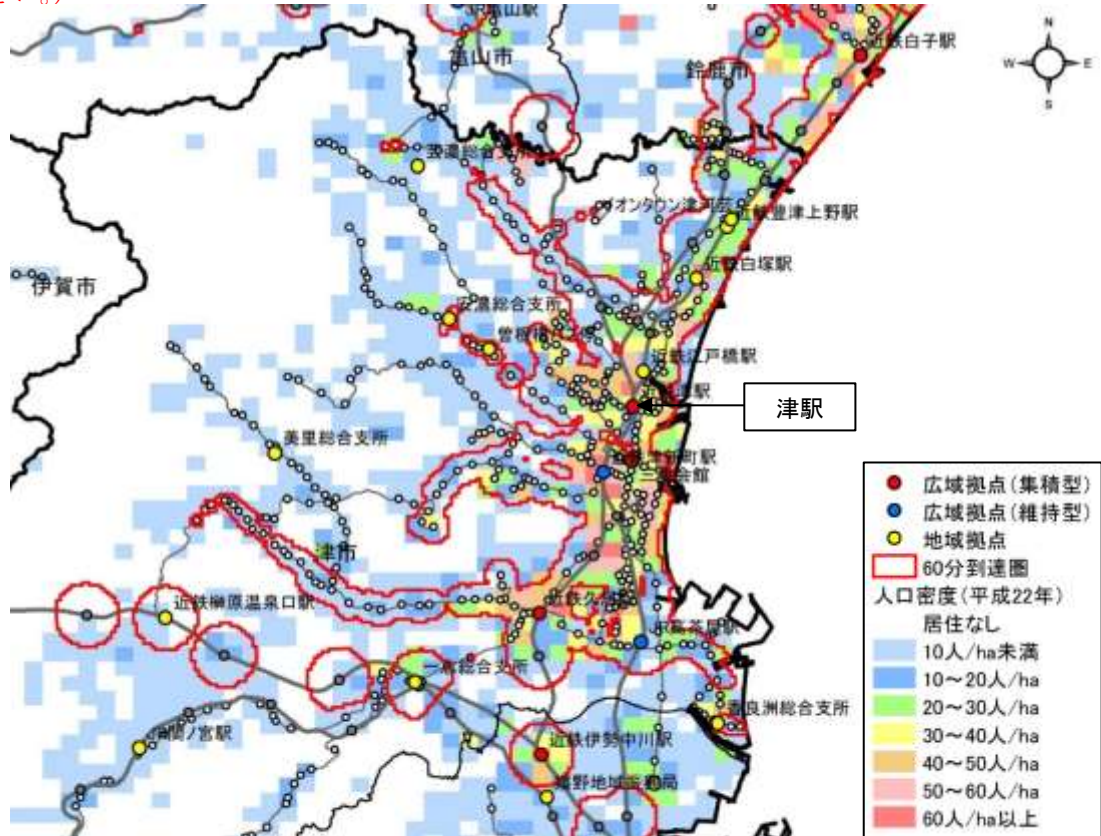
- ・国土数値情報「高速道路時系列データ（平成 26 年度）」「緊急輸送道路データ（平成 25 年度）」「鉄道データ（平成 26 年）」国土交通省
- ・都市計画基礎調査（平成 24 年度、三重県）

図 2-13 主要な交通施設の配置状況



(参考) 公共交通による広域拠点のアクセシビリティ

「アクセシビリティ指標活用の手引き(案)」を参考に、公共交通による広域拠点のアクセシビリティを検討しました。下図は、広域拠点のうち津駅を例として、徒歩、鉄道及びバス（コミュニティバス、運行本数1本/時未満の路線を除く）で60分以内に津駅へ行くことができる範囲を示しています。これによると、津駅への公共交通60分到達圏内には、津市の概ね7割、中南勢圏域の概ね5割の人口が居住していることがわかります。(その他の広域拠点については、資料編を参照してください。)



■公共交通で60分以内に到達できる圏内の居住人口

		総人口		公共交通60分到達圏内人口	
		H22	H52	H22	H52
中南勢	津市	285,451	231,321	190,094 (67%)	157,173 (68%)
	松阪市	167,909	136,668	57,805 (34%)	47,573 (35%)
	多気町	15,458	12,145	960 (6%)	736 (6%)
	明和町	28,434	19,012	5,761 (25%)	4,583 (24%)
	大台町	10,416	6,666		
	大紀町	9,876	5,078		
	小計	512,544	410,890	254,620 (50%)	210,065 (51%)
その他	1,342,180	1,096,766	206,451 (15%)	184,287 (17%)	
合計	1,854,724	1,507,656	461,071 (25%)	394,352 (26%)	

※1: 500mメッシュを面積按分して算出。  
 ※2: メッシュを集計しているためH22人口は国勢調査値と一致しない。  
 ※3: ( )は総人口に占める割合。



**【環境負荷低減への取組】**

環境負荷への対策として平成24年3月に「三重県地球温暖化対策実行計画」を策定し、各種の取組を実施しています。一方で、現在の三重県のCO<sub>2</sub>排出量は、運輸・工業プロセス部門で減少傾向を示しているものの、民生業務その他部門で特に増加し、全体的にも増加しているのが現状です。



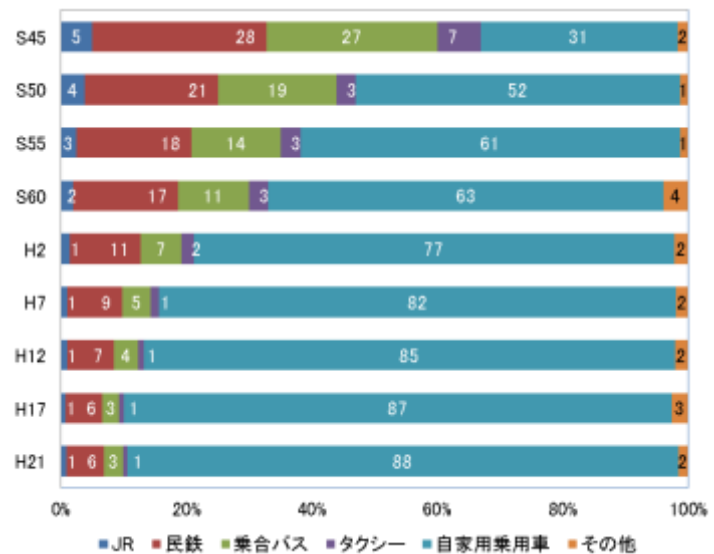
出典：「2012年度（平成24年度）三重県温室効果ガスの排出量について」

図 2-14 二酸化炭素排出量の推移

**c. 人が集まり交流する空間の形成**

公共交通機関は、子どもやお年寄りなど自動車を運転できない人たちにとって大切な移動手段であり、また、自家用車に比べて自然環境に優しい乗り物といえます。

しかし、三重県における輸送機関別の分担率をみると、自家用車が極端に増加しており、鉄道・バス等の公共交通機関が減少しています。



※自動車輸送統計の調査方法の変更（平成22年10月以降）により「自家用乗用車」は未発表で、平成22年以降はデータがありません。

出典：数字で見る中部の運輸（国土交通省中部運輸局）をもとに作成

図 2-15 三重県における輸送機関別分担率

人が集まり交流する空間としては各市町の中心市街地が想定されますが、各市町の中心市街地は商業機能の空洞化の状況が依然として継続しており、その活性化が大きな課題の一つとなっています。県内において、改正中心市街地活性化法に基づき中心市街地活性化基本計画の認定を受けて取組を実施しているのは、伊賀市（計画期間：[第1期]平成20年11月～平成26年10月、[第2期]協議中）及び伊勢市（計画期間：平成28年4月～平成33年3月）の2市です。

### ③ 安全で快適な生活環境の創造

#### a. 安全・安心な都市の構築

安全で快適な生活環境の創造のため、防災・減災に向けて必要な都市基盤整備を促進し、災害に強い都市づくりを進めてきました。しかし、東日本大震災の発生を契機として、想定以上の被害が発生する可能性が指摘されるようになっていきます。

全国的に、大雨が発生する頻度が上がっています。三重県においては、県内 20 地点における最近 10 年間（平成 16 年～平成 25 年）の 1 時間降水量 50 ミリ以上（非常に激しい雨）の観測回数は、30 年前の 10 年間と比較して約 1.2 倍であるとともに、同 80 ミリ以上（猛烈な雨）の観測回数は約 3.5 倍の増加になっています。



(津地方気象台からの提供資料を基に作成)

(上) 1 時間降水量 50 ミリ以上 (下) 1 時間降水量 80 ミリ以上

〔 20 地点：津、亀山、笠取山、四日市、白山、小俣、上野、粥見、北勢、藤坂峠、桑名、名張、南伊勢、鳥羽、紀伊長島、阿児、宮川、尾鷲、熊野新鹿、御浜 〕

出典：三重県地域防災計画 風水害等対策編（平成 27 年 3 月修正）

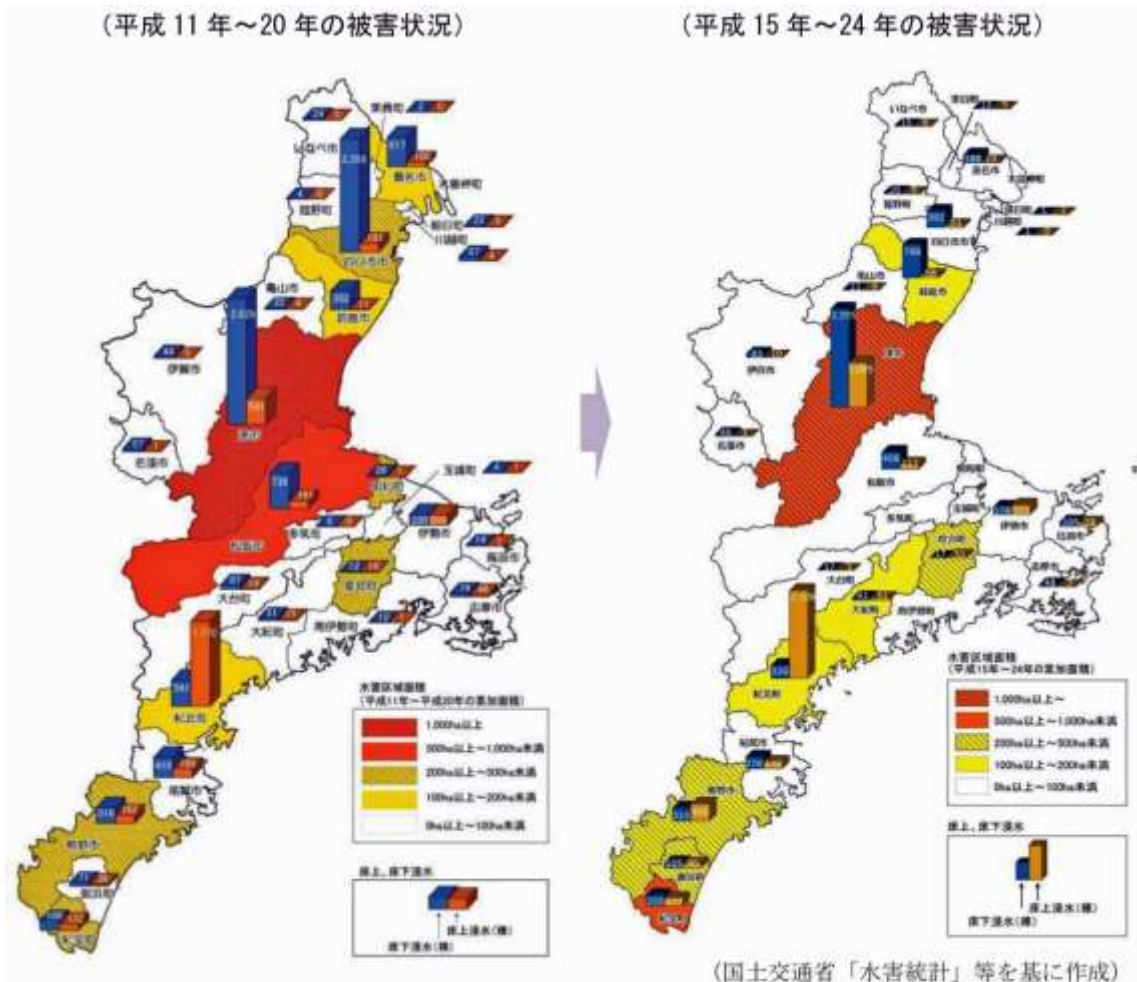
図 2-16 アメダスが観測した短時間強雨の発生回数（三重県 20 地点）



平成 11 年から平成 20 年まで、及び平成 15 年から平成 24 年までのそれぞれ 10 年間の洪水被害の状況を以下に示します。

平成 11 年から平成 20 年の被害状況には、東海豪雨をもたらした平成 12 年台風第 14 号により、県北部を中心に大きな浸水被害があったことが顕著に表れています。平成 15 年から平成 24 年の被害状況からは、平成 23 年の紀伊半島大水害による浸水被害が、県南部とりわけ紀南地域において顕著であったことがわかります。

また、全壊（流出を含む）もしくは半壊にいたった家屋数をみると、平成 15 年から平成 24 年の被害のほうがかかなり大きくなっており、紀伊半島大水害による被害が甚大であったことがわかります。



出典：三重県地域防災計画 風水害等対策編（平成 27 年 3 月修正）

図 2-17 県内における洪水被害の状況

表 2-9 全壊及び半壊棟数

	全壊棟数	半壊棟数	計
平成 11 年～20 年 (10 年間)	29 棟	72 棟	101 棟
平成 15 年～24 年 (10 年間)	108 棟	1,143 棟	1,251 棟

※上記の棟数には、洪水のほか土砂災害等による被災も含まれる。

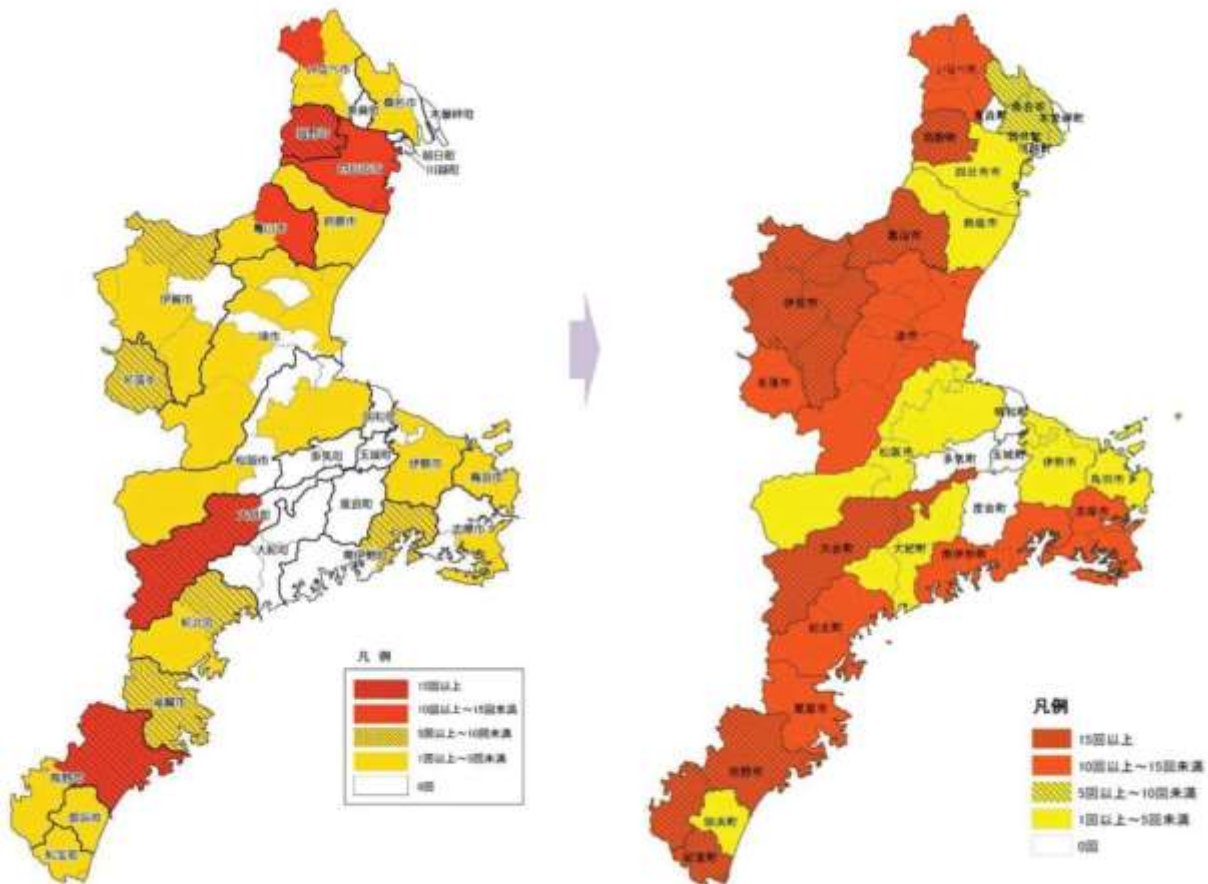
(三重県「消防防災年報」を基に作成)

出典：三重県地域防災計画 風水害等対策編（平成 27 年 3 月修正）

三重県におけるがけ崩れ、土石流、地すべりなど土砂災害の発生回数は、近年において増加傾向を示しています。

(平成 11 年～20 年の発生状況)

(平成 16 年～25 年の発生状況)



※図中の細い実線は、旧 69 市町村(平成 15 年 11 月までの)の旧行政界を表す。  
(三重県防災砂防課資料「市町別(年別)災害発生件数」を基に作成)

出典：三重県地域防災計画 風水害等対策編(平成 27 年 3 月修正)

図 2-18 県内の土砂災害の発生状況

地震・津波については、平成 24 年度に国が公表した南海トラフ巨大地震の被害想定などを参考にしながら、下記の 2 つのクラスの地震を想定した三重県としての地震被害想定結果を平成 26 年 3 月に公表しました。また、これと併せて公表した津波浸水予測図と同じ内容を、平成 27 年 3 月に津波防災地域づくり法に基づく津波浸水想定として設定しました。

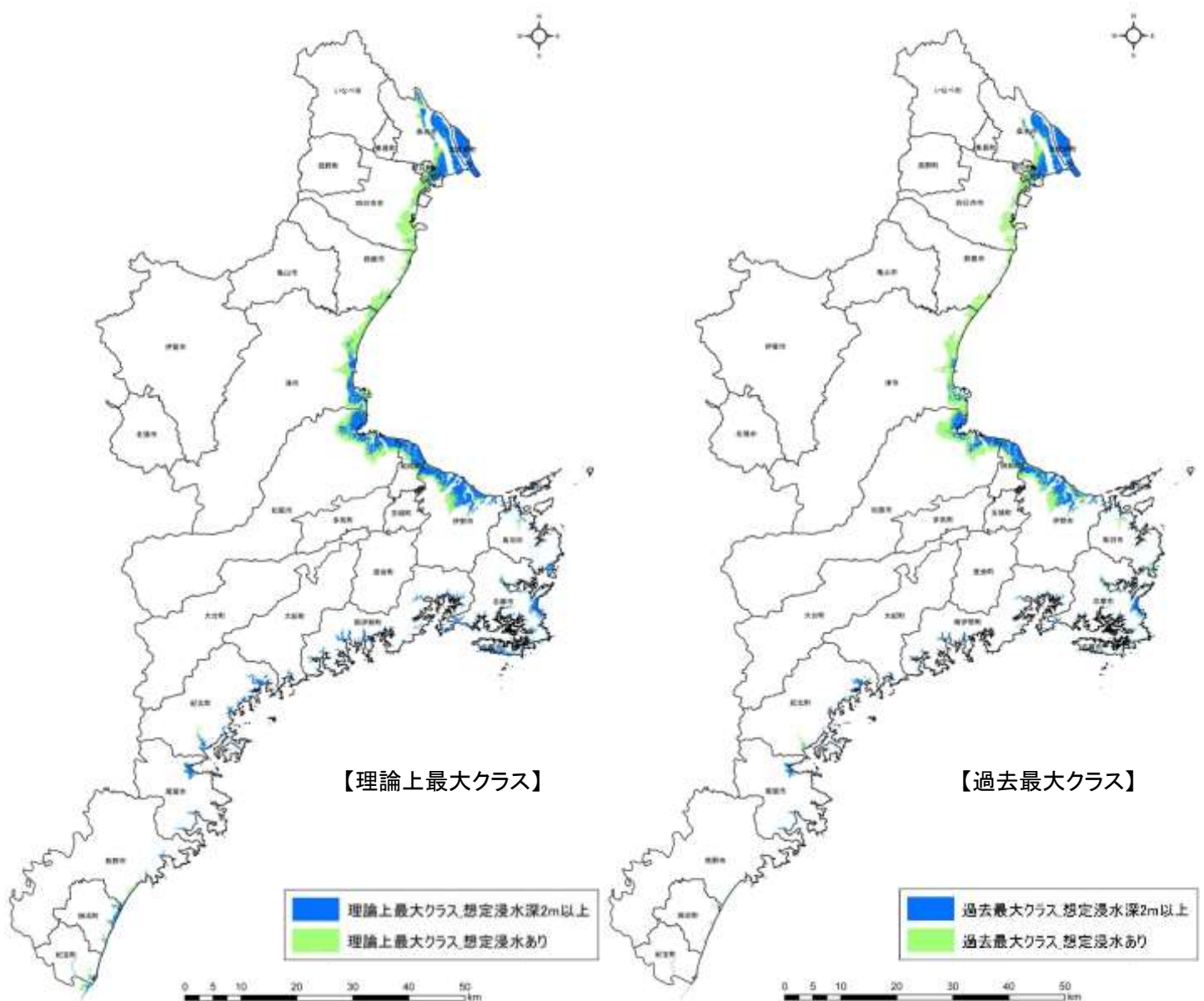
1. 過去最大クラスの南海トラフ地震：過去概ね 100 年から 150 年間隔でこの地域を襲い、揺れと津波により三重県に甚大な被害をもたらしてきた、歴史的にこの地域で起こり得ることが実証されている南海トラフ地震
2. 理論上最大クラスの南海トラフ地震：あらゆる可能性を科学的見地から考慮し、発生する確率は極めて低いものの理論上は起こり得る最大クラスの南海トラフ地震

被害想定では、理論上最大クラスの南海トラフ地震において、全焼・焼失棟数が約 248,000 棟、死者数の最大値約 53,000 人と想定しています。圏域別には、伊勢志摩圏域で約 20,000 人、東紀州で約 17,000 人となっています。

表 2-10 三重県津波浸水予測結果

地域区分	理論上最大		三重県／内閣府	過去最大
	浸水面積 (ha)			浸水面積 (ha)
	三重県	内閣府	三重県	
北勢	8,210.93	480	17.11	6,640.09
中勢	8,873.34	3,690	2.40	7,557.09
伊勢志摩	8,768.50	7,670	1.14	7,509.06
東紀州	2,515.38	2,400	1.05	1,675.69
計	28,368.15	14,250	1.99	23,381.93
伊勢湾沿岸(伊勢市以北)	20,856.82	7,320	2.85	17,903.40
熊野灘沿岸(鳥羽市以南)	7,511.33	6,920	1.09	5,478.53

出典：平成 25 年版 三重県地震被害想定結果



出典：三重県地震被害想定結果をもとに作成

図 2-19 津波浸水想定



【津波浸水想定区域の居住人口、立地施設等】

三重県では海に面して形成されている市街地が多く、津波浸水想定区域には多くの人が居住し、また、施設が立地しています。例として、過去最大クラスの南海トラフ地震による津波浸水想定区域には、概算で県総人口の約 16%が居住しているとともに、県内の主要な公共公益施設の約 18%が同区域内に立地しています。

※主要な公共公益施設：二次救急指定等の主要な医療施設、福祉施設、児童福祉施設、文化体育施設、コミュニティ施設、教育施設、市役所・町役場、国・県の機関、警察署、消防署及び郵便局の合計数とします。なお、機能を単位に集計しています。(資料：国土数値情報(国土交通省)、保健医療計画(第5次改訂)(平成25年3月、三重県))

表 2-11 津波浸水想定区域の居住人口・立地主要施設の比率(各圏域総数に対する比率)

	三重県	北勢	中南勢	伊勢志摩	伊賀	東紀州
人口	16%	12%	18%	31%	—	20%
主要公共公益施設	18%	14%	14%	39%	—	27%

※人口は図 2-9 に示すメッシュデータを集計し、施設は GIS 上で施設数を集計した。

また、現行マスタープランに位置づけられている広域拠点のうち、以下の拠点については、その中心施設が過去最大クラスの場合の津波浸水想定区域内にあります。

集積型	桑名駅、JR 四日市駅、三重会館、伊勢市駅、宇治山田駅、鳥羽駅、鶯方駅
維持型	高茶屋駅

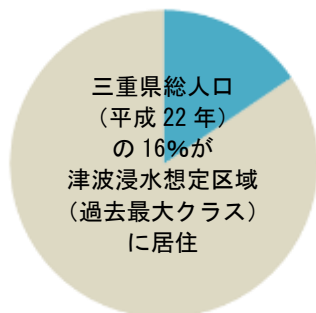


図 2-20 津波浸水想定区域内人口割合

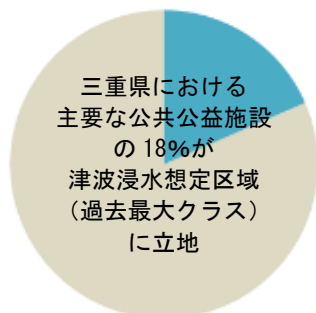
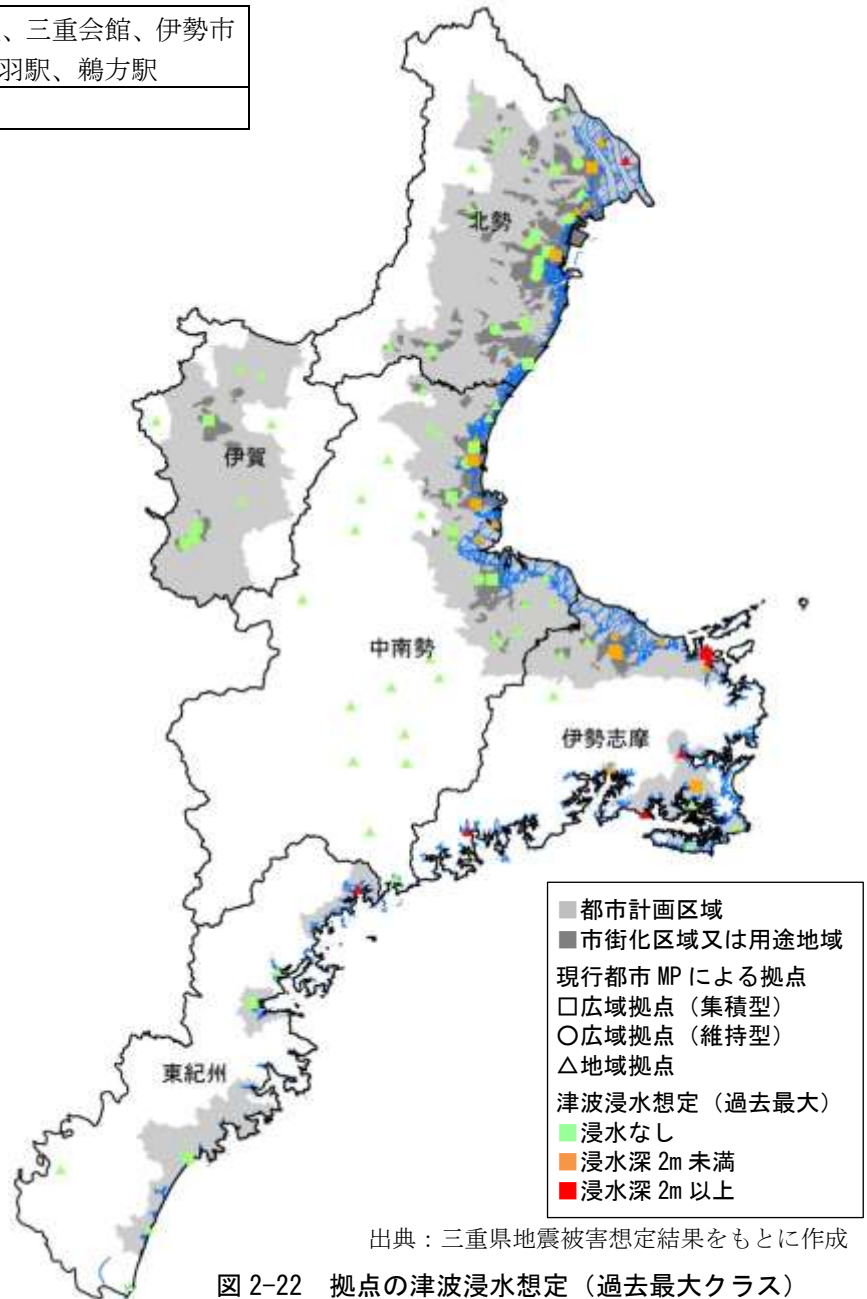


図 2-21 主要な公共公益施設津波浸水想定区域内立地割合

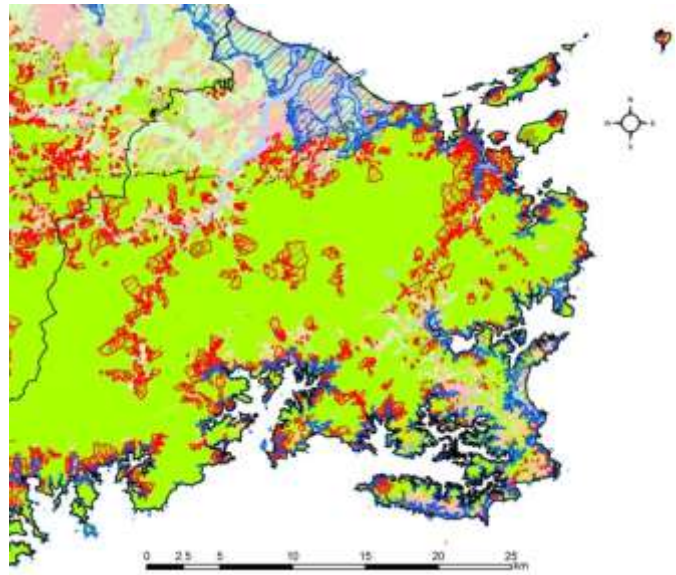


出典：三重県地震被害想定結果をもとに作成

図 2-22 拠点の津波浸水想定 (過去最大クラス)

**【地形等の特性】**

県内の地域は様々な地理的特性を有しており、こうした地形等の特性によって、災害リスクのあり方や、土地利用の余地等に違いが生じることになります。



出典：三重県地震被害想定結果、国土数値情報「土地利用細分メッシュデータ」(国土交通省)をもとに作成

図 2-23 地形等の特性 (例：伊勢志摩圏域)

**b. 快適な生活環境づくり**

都市計画道路においては、三重県全体で計画決定済みの都市計画道路の延長は 1,417km となっています。そのうち北勢 720km、中南勢 361km、伊賀 127km の順となっています。

整備率は伊勢志摩圏域が 67%と高く、東紀州圏域が 25%と低くなっていますが、その他の圏域は概ね 50%程度の整備率となっています。

表 2-12 整備済み都市計画道路の延長及び道路整備率 (圏域別)

圏域	計画決定・都市計画道路延長 (m)				整備済み延長 (m)	整備率 (%)
	自動車専用道路	幹線道路	区画道路・その他	合計		
北勢圏域	68,113	640,502	11,500	720,115	327,396	45.46
中南勢圏域	0	357,095	3,920	361,015	170,848	47.32
伊勢志摩圏域	8,100	100,594	0	108,694	73,770	67.87
伊賀圏域	6,780	119,165	1,060	127,005	64,702	50.94
東紀州圏域	54,620	45,024	980	100,624	25,406	25.25
三重県計	137,613	1,262,380	17,460	1,417,453	662,122	46.71

資料：都市計画基礎調査

下水道においては、市町と連携して流域下水道や公共下水道の整備を進めてきた結果、下水道普及率は平成 27 年度末で 51.7%まで向上しましたが、全国の 77.8%を下回っている状況です。ただし、農業集落排水施設や浄化槽等を合わせた汚水処理人口普及率は、全国の 89.9%に対して 82.6%と差は小さくなってきています。

圏域別では、北勢圏域、中南勢圏域、伊賀圏域では汚水処理人口普及率が 80%を超えている一方、伊勢志摩圏域や東紀州圏域では低くなっています。

※ここでいう「下水道普及率」及び「汚水処理人口普及率」とは、以下による値です。

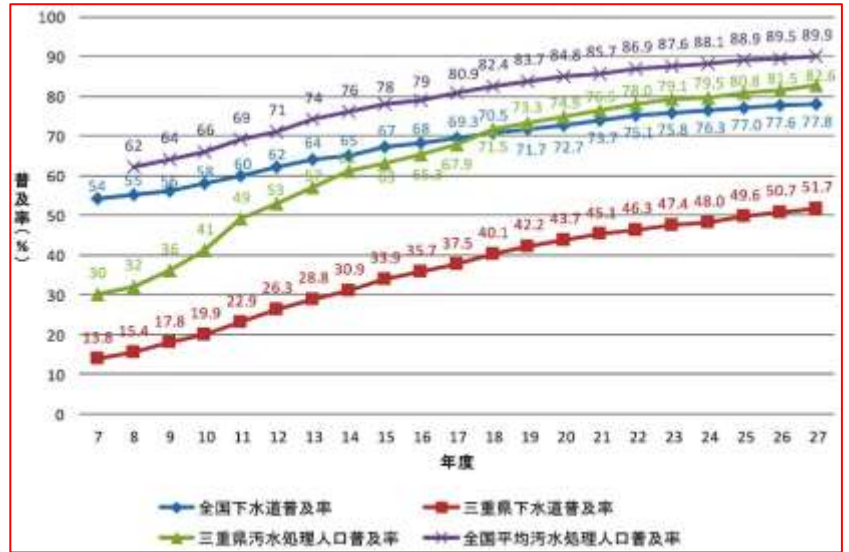
- ・ 下水道普及率 = 下水道処理区域内人口 ÷ 住民基本台帳人口
- ・ 汚水処理人口普及率 = 下水道・農業集落排水施設・浄化槽等処理区域内人口 ÷ 住民基本台帳人口



表 2-13 三重県における汚水処理人口普及率及び下水道普及率  
(平成 27 年度末時点)

	汚水処理人口普及率	下水道普及率
三重県	82.6%	51.7%
北勢	91.2%	70.2%
中南勢	81.8%	44.8%
伊勢志摩	64.9%	36.4%
伊賀	86.9%	23.4%
東紀州	36.5%	3.3%

出典：みえの下水道 2016-2017（三重県県土整備部下水道課）をもとに作成



※平成 22 年度末は岩手県、宮城県、福島県を除く。

※平成 23 年度末は岩手県、福島県を除く。

※平成 24・25・26 年度末は、福島県を除く。

※平成 27 年度末は、福島県の一部市町を除く。

出典：みえの下水道 2016-2017（三重県県土整備部下水道課）

図 2-24 汚水処理人口普及率及び下水道普及率の推移

④ 地域活力の維持・向上

a. 広域道路ネットワーク等を活かした産業集積

三重県では、人口減少の中でも地域の活性化と生活水準の維持向上を図るためには地域間の連携の推進が不可欠と考え、産業集積・広域交流の推進など地域振興に大きな影響を与える高規格道路ネットワークの早期形成を優先課題として、新名神高速道路・近畿自動車道紀勢線・熊野尾鷲道路及び東海環状自動車道などの整備を促進してきました。

昨今の状況から、成長が期待される次世代自動車産業、航空機・宇宙産業などを支える産業分類にはない高度部材産業や先端技術産業（創エネ、畜エネ、省エネ）などの「先端ものづくり産業」、地域に密着した観光関連産業、徹底した顧客志向型産業などの「サービス産業」、今後の新しいビジネスモデルが期待される環境・エネルギー（クリーンエネルギー）関連産業や医療・健康関連産業（ライフイノベーション）などの「社会的問題解決型成長産業」の市場創出に取り組む方針が、平成24年度策定の「みえ産業振興戦略」に示されています。

これらの戦略の実現を支援するためにも、広域ネットワークの形成は重要な役割を果たすことが期待されます。

【工場立地動向】

工場立地動向調査をもとに工場の立地状況（敷地面積1,000㎡以上の工場用地等の取得状況等）をみると、平成元年以降は概ね減少する傾向にあります。平成25年に件数、面積ともに増加していますが、太陽光発電を目的とした電気業の立地案件の増加によるものであり、これを除くと引き続き減少傾向にありました。ただし、直近の平成27年は、電気業を除く件数・面積とともに増加しています（件数87%増、面積81%増）。これは、前年と概ね同水準であった全国の傾向（件数4%増、面積5%減）と比較しても大きな増加になっています。



※平成27年調査から電気業のうち太陽光発電施設が対象外になったため、平成27年は件数・面積の値が減っています。  
出典：経済産業省「工場立地動向調査」、三重県企業誘致推進課資料をもとに作成

図2-25 工場立地動向の推移

平成20年以降の電気業を除く立地動向をみると、圏域別では北勢圏域及び中南勢圏域で立地が多く、伊賀圏域においてもある程度の立地があります。一方で、伊勢志摩圏域及び東紀州圏域では立地件数が少なく、立地に係る平均の面積が小さくなっています。

表2-15 圏域別工場立地動向の推移（電気業を除く）

	平成20年		平成21年		平成22年		平成23年		平成24年		平成25年		平成26年		平成27年		合計			
	件数	敷地面積	件数	敷地面積	件数	敷地面積	件数	敷地面積	件数	敷地面積	件数	敷地面積	件数	敷地面積	件数	敷地面積	件数	敷地面積	平均面積	
全県	合計	23	58.8	32	84.1	19	40.3	30	39.7	20	27.1	15	26.1	15	16.4	28	29.2	182	321.7	1.8
	新設	12	18.7	17	46.6	12	34.3	20	33.7	16	23.1	12	21.3	12	13.4	22	26.3	123	217.2	1.8
	増設	11	40.0	15	37.6	7	6.0	10	6.0	4	4.1	3	4.8	3	3.1	6	2.8	59	104.5	1.8
北勢圏域	合計	15	44.1	18	47.4	6	20.8	13	8.9	9	19.6	7	12.7	7	7.8	13	14.9	88	176.3	2.0
	新設	7	12.6	9	27.3	4	20.4	8	5.9	6	15.8	7	12.7	5	5.3	11	13.9	57	114.0	2.0
	増設	8	31.5	9	20.1	2	0.4	5	2.9	3	3.8	-	-	2	2.5	2	1.1	31	62.4	2.0
中南勢圏域	合計	3	6.5	7	24.6	6	6.0	14	26.1	3	1.9	4	10.2	3	4.4	3	2.5	43	82.1	1.9
	新設	1	0.7	4	9.9	3	2.2	10	24.3	2	1.6	2	7.5	3	4.4	3	2.5	28	53.0	1.9
	増設	2	5.8	3	14.7	3	3.8	4	1.8	1	0.3	2	2.7	-	-	-	-	15	29.1	1.9
伊勢志摩圏域	合計	-	-	-	-	4	2.4	2	3.4	4	3.2	4	3.2	2	0.9	1	0.5	17	13.6	0.8
	新設	-	-	-	-	2	0.6	2	3.4	4	3.2	3	1.0	2	0.9	1	0.5	14	9.7	0.7
	増設	-	-	-	-	2	1.8	-	-	-	-	1	2.1	-	-	-	-	3	3.9	1.3
伊賀圏域	合計	3	7.7	5	11.5	3	11.1	1	1.3	4	2.4	-	-	1	0.5	9	9.4	26	44.0	1.7
	新設	2	5.0	3	9.0	3	11.1	-	-	4	2.4	-	-	-	5	7.6	17	35.1	2.1	
	増設	1	2.7	2	2.6	-	-	1	1.3	-	-	-	-	1	0.5	4	1.8	9	8.9	1.0
東紀州圏域	合計	2	0.5	2	0.6	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2.8	2	1.8	8	5.7	0.7
	新設	2	0.5	1	0.4	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2.8	2	1.8	7	5.5	0.8
	増設	-	-	1	0.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	0.2	0.2

出典：三重県企業誘致推進課資料をもとに作成

### 【工業系土地利用誘導ゾーンと工場立地の位置】

現行マスタープランでは、用途地域外における工業系土地利用構想・計画地及び工業系用途地域で2ha以上の未利用地がある区域を「工業系土地利用誘導ゾーン\*1」と位置づけ、大規模工業施設の立地を促進してきました。

これと、平成22年度から平成27年度の間における工場立地法に基づく特定工場\*2の届出位置の対応状況を以下に整理します。

\*1 工業系土地利用誘導ゾーン：現行の「工業系土地利用誘導ゾーン」は、大規模工場誘致にあたって迅速な手続きを可能にすることで、立地の促進を図ろうとするものです。市街地外の県マスタープランに位置づけのない位置に立地しようとする場合は、適正な土地利用調整等の手続を経た上で立地が可能になります。

\*2 特定工場：敷地面積9,000㎡以上又は建築面積3,000㎡以上の製造業（加工修理含む）、電気・ガス・熱供給業（水力・地熱・太陽光発電所を除く）に係る工場又は事業場をいいます。

表 2-16 工場立地法に基づく特定工場の届出状況（H22-27）

立地区域		届出件数		うち工業系土地利用誘導ゾーン内	
		新設	変更	新設	変更
市街地内	市街化区域	9	33	3 (33%)	7 (21%)
	用途地域	5	7	1 (20%)	
	計	14	40	4 (29%)	7 (18%)
市街地外	調整区域	7	9	2 (29%)	1 (11%)
	白地	7	11	3 (43%)	1 (9%)
	都計外	5	4		
	計	19	24	5 (26%)	2 (8%)
合計		33	64	9 (27%)	9 (14%)

※市街地内：市街化区域、非線引用途地域

※市街地外：市街化調整区域、非線引用途未指定地域、都市計画区域外  
出典：特定工場新設（変更）届出調書をもとに作成

新設又は変更の届出のあった特定工場 97 件（新設 33 件・変更 64 件）のうち、その位置が工業系土地利用誘導ゾーン内であるものは、新設が 9 件（27%）、変更が 9 件（14%）となっています。

市街地外の工業系土地利用誘導ゾーン外に位置するものは 36 件（新設 14 件・変更 22 件）です。このうち、都市計画区域外であったものが 9 件あります。その他、伊賀圏域に位置するものが 17 件（新設 7 件・変更 10 件）と比較的多くなっていますが、伊賀圏域における届出の位置は全てが工業系土地利用誘導ゾーンからは外れています。（現行では、伊賀圏域での工業系土地利用誘導ゾーンは、全て市街地内に設定されています。）

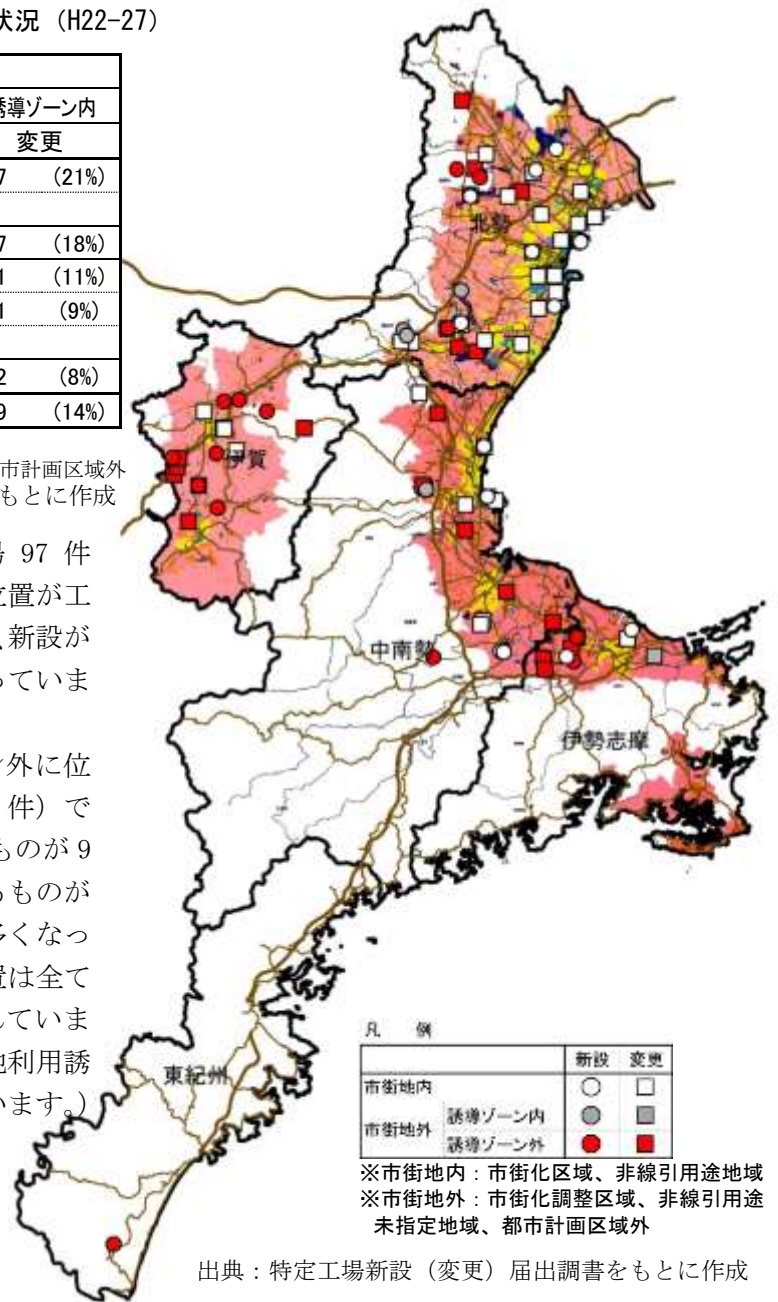


図 2-26 工場立地法に基づく特定工場の届出状況（H22-27）

【事業所数及び事業所敷地面積】

平成元年以降の従業員数 30 人以上の工場の事業所数及び事業所敷地面積の推移をみると、北勢圏域・中南勢圏域では事業所数は減少傾向にあります。伊賀圏域では事業所数・敷地面積ともにゆるやかな増加傾向ですが、概ね横ばいです。伊勢志摩圏域・東紀州圏域では、事業所数・敷地面積はいずれも減少傾向になっています。



出典：三重の工業（三重県戦略企画部統計課）をもとに作成  
図 2-27 工場の事業所数（従業員 30 人以上の事業所）



出典：三重の工業（三重県戦略企画部統計課）をもとに作成  
図 2-28 工場の事業所敷地面積（従業員 30 人以上の事業所）

市町別では、いなべ市、東員町、菰野町、多気町、名張市などで事業所数が増加しています。一方、伊勢志摩圏域や東紀州圏域の市町においては、事業所数は大きく減少しています。

表 2-17 工場の事業所数(従業員 30 人以上の事業所)

	平成元年	平成5年	平成10年	平成15年	平成20年	平成25年	
北勢	四日市市	199	199	166	138	148	136
	桑名市	97	73	70	68	73	65
	鈴鹿市	88	86	69	73	66	65
	亀山市	44	50	47	42	43	44
	いなべ市	42	48	43	44	50	51
	木曽岬町	8	8	9	11	12	12
	東員町	15	18	18	19	22	22
	菰野町	27	35	36	34	42	39
	朝日町	7	8	7	10	10	8
	川越町	18	16	16	16	16	14
計	545	541	481	455	482	456	
中南勢	津市	143	151	133	115	124	119
	松阪市	98	103	103	92	93	86
	多気町	10	12	11	11	15	16
	明和町	16	15	18	11	15	13
	大台町	7	6	6	4	5	4
	大紀町	11	9	8	8	7	8
	計	285	296	279	241	259	246
伊勢志摩	伊勢市	87	77	73	63	49	50
	鳥羽市	8	7	5	2	2	3
	志摩市	24	24	19	17	11	7
	玉城町	12	14	12	10	12	11
	度会町	6	5	1	3	3	1
	南伊勢町	13	12	7	4	4	1
計	150	139	117	99	81	73	
伊賀	名張市	36	43	52	47	49	47
	伊賀市	98	109	104	94	99	99
	計	134	152	156	141	148	146
東紀州	尾鷲市	12	11	6	7	4	3
	熊野市	13	12	5	4	4	2
	紀北町	14	16	12	10	8	4
	御浜町	1	-	-	1	1	1
	紀宝町	7	6	5	3	3	4
計	47	45	28	25	20	14	
三重県合計	1,161	1,173	1,061	961	990	935	

出典：三重の工業（三重県戦略企画部統計課）をもとに作成



### 【三重県における産業の特性】

三重県及び各圏域の産業の特性について整理します。

表 2-18 三重県及び各圏域の産業の特性

		産業の特性
三重県		<ul style="list-style-type: none"> <li>・エレクトロニクス、電気機械器具、輸送用機械器具製造業が中核産業。</li> <li>・化学工業は付加価値構成比、生産波及効果が大。</li> <li>・漁業の生産性高い。</li> <li>・サービス産業の生産性向上が必要。</li> </ul>
圏域	北勢	<ul style="list-style-type: none"> <li>・石油化学コンビナート、自動車、電子デバイス関連の事業所が集積。</li> <li>・製造品出荷額等、従業者数、事業所数ともに、県全体の過半以上。</li> </ul>
	中南勢	<ul style="list-style-type: none"> <li>・電子部品、医薬品、自動車部品等の比較的大規模な事業所が立地。</li> <li>・航空機産業の新たな拠点となる事業所が立地。</li> <li>・サービス業の事業所及び従業者割合が高い。</li> </ul>
	伊勢志摩	<ul style="list-style-type: none"> <li>・伊勢神宮や伊勢志摩国立公園など、世界に誇る観光資源を有する。</li> <li>・製造業では、電子部品、食品加工等が集積。</li> <li>・農林水産業も地域の重要な産業。</li> </ul>
	伊賀	<ul style="list-style-type: none"> <li>・医薬品、自動車部品等の比較的大規模な事業所が立地。</li> <li>・近畿圏に本社を有する多くの事業所が進出。</li> </ul>
	東紀州	<ul style="list-style-type: none"> <li>・世界遺産熊野参詣道など、世界に誇る観光資源を有する。</li> <li>・製造業では食品加工が比較的多く立地。</li> <li>・農林水産業も地域の重要な産業。</li> </ul>

出典：経済産業省「平成 24 年経済センサス」「三重県の地域経済分析」、三重県「地域再生計画 三重県企業拠点強化（本社機能移転等）促進プロジェクト」をもとに作成

#### b. 個性を活かした集客交流の推進

平成 16 年の熊野参詣道の世界遺産登録、平成 25 年に実施された伊勢神宮の式年遷宮、平成 28 年に開催された伊勢志摩サミットなどを契機として、地域資源を最大限に活かした三重県の魅力を情報発信しています。観光入込客数は、式年遷宮が行われた平成 25 年をピークにして平成 26 年にやや減少していましたが、平成 27 年には再び増加しています。

表 2-19 圏域別観光入込客数の推移（単位：千人）

	合計	北勢地域	中南勢地域	伊勢志摩地域	伊賀地域	東紀州地域
平成 21 年	33,698	13,511	5,901	9,278	3,374	1,634
22	35,622	16,215	6,350	9,092	2,358	1,607
23	35,653	16,414	6,493	8,784	2,417	1,545
24	37,868	17,236	7,039	9,041	2,781	1,771
25	40,799	17,271	6,166	12,611	2,940	1,811
26	38,243	16,742	6,119	10,468	2,973	1,941
27	39,212	18,195	6,304	9,325	3,197	2,191

出典：三重県統計書（平成 26 年まで）及び三重県雇用経済部観光局観光政策課資料（平成 27 年）をもとに作成

#### ⑤ 県民が主役の地域づくり

都市づくりの主役は県民との観点から、県民の参画と協働による取組を推進するため、都市計画や都市づくりに関する知識の普及や積極的な情報提供を行うとともに、県民意見の反映機会の増加を図るなど、県民が参画しやすい環境づくりを進めてきました。さらに、平成 24 年 4 月に策定した「みえ県民力ビジョン」では、「協創」による三重づくりを進めていくこととしています。

地域の方々を交えたワークショップ等の手法による企画・計画段階からの計画づくりなど、

住民との協働による地域の個性を活かしたまちづくりを進めてきており、これまでに以下のよう  
な取組を行ってきました。

＜景観まちづくりプロジェクト事業：平成 19 年度～＞

- ・外宮前地区（平成 19～20 年度：伊勢市、外宮参道懇話会など）
- ・丹生地区（平成 19～20 年度：多気町、丹生地区街道まちづくり委員会など）
- ・女鬼峠地区（平成 19～21 年度：多気町、女鬼峠・街道まちづくり会など）
- ・斎宮地区（平成 19～21 年度：明和町、史跡斎宮跡・伊勢街道まちづくり会など）
- ・上多気地区（平成 19～22 年度：津市、伊勢本街道を活かした地域づくり協議会など）
- ・美旗地区（平成 21～22 年度：名張市、美旗まちづくり協議会など）
- ・三木里地区（平成 23～24 年度：尾鷲市、三木里地区グリーンツーリズム推進会議など）
- ・木本地区（平成 24～27 年度：熊野市、木本港（海岸）堤防修景化事業検討会など）

また、日本風景街道「伊勢熊野みち」の活動として、伊勢神宮から熊野三山を結ぶ世界遺産  
熊野古道伊勢路を中心に、地域住民と行政の協働のもと、「世界遺産熊野古道を巡る癒しともて  
なしのふれあい街道づくり」をテーマに、環境の保全と自然・歴史・文化的資源を活用した地  
域づくりに取り組んでいます。（資料：三重県県土整備部景観まちづくり課）

さらに、地域住民をはじめとする多様な方々が、主体的かつ積極的に都市計画に関わって  
いくことができる制度である都市計画提案制度については、手続に関する基準（都市計画提案制  
度手続基準）を定め、提案に係る手続を円滑に進められるよう、事前相談等を受け付けていま  
す。



#### 4 現行マスタープランの検証から見えてきた課題の整理

上記「1. 近年の全国的な社会情勢と三重県の状況」、「2. 関連する諸計画、法整備等の動向」及び「3. 現行マスタープランの検証」を踏まえ、**現行マスタープランを検証した結果として見えてきた課題を整理します。**

##### 1) 圏域の設定について

現行マスタープランで設定している5つの圏域の区分について妥当性の検証を行った結果、ある一定の圏域を形成している状況に大きな変化は見られず、項目ごとに差異はあるものの圏域が形成されている状況を確認しました。一部の圏域においては、若干の流動や生活圏域設定が異なることがありますが、現行の区分を変更する必要はないと考えられるため、**圏域区分は変更しないこととします。**一定の生活圏域等の形成状況から、**圏域に区分してそれぞれの将来像や方針等を示すことが引き続き必要です。**

##### 2) 都市計画区域の再編について

平成15年以降の合併により複数の都市計画区域を有することになった5市のうち、松阪市及び志摩市については都市計画区域の統合を実施し、伊賀市については区域再編に向けて検討中です。残る津市及びいなべ市については、市のまちづくりの方針に配慮する必要がありますが、同一市のなかでの一体的なまちづくりを進める観点から、**基本的には一つの都市計画区域とすることが望ましいと考えます。**

##### 3) 都市づくりの方向について

###### a. 美しく魅力と個性にあふれる地域づくり

都市計画区域内の都市公園・緑地の整備状況は、三重県全体の平均では10.65㎡/人と都市公園法施行令の標準値（10㎡/人）を満たしていますが、**圏域別では不足している圏域があります。**

このため、災害時のオープンスペースを確保する観点も踏まえ、**今後も整備を促進する必要があります。**また、歴史・文化、景観等の地域資源を活かし、**個性あるまちづくりにつなげていく必要があります。**

県としては、広域的な緑地等について保全・整備等を行う一方で、**上記のような取組については市町が主体となって地域の個性を活かした緑や歴史・文化、景観等に対してきめ細やかに取組むことが有効であるため、市町の取組を支援・補完していく必要があります。**

###### b. 持続可能な地域づくり

人口減少・少子高齢化が進展するなか、「コンパクト+ネットワーク」による都市・地域づくりが全国的な考え方になっています。三重県においては、**持続可能な地域づくりのための集約型都市構造の構築に向けて、広域拠点の設定による大規模商業施設の郊外立地の抑制や各種機能の集約化の取組等を実施してきました。**しかし、**既成市街地内の人口密度は低下傾向にあり、また、拠点への都市機能の集約が進んでいる状況にあるとはいえません。**

今後は、新たに創設された立地適正化計画を具体的な実現手法の一つと想定した方針を示し、**集約型都市構造の形成**に向けた取組を発展させる必要があります。その上では、**鉄道沿線にある程度の規模を有する都市が連なっているという三重県の特性を生かした都市構造を形成し、各都市の機能分担を図る等**のことが考えられます。**また、大規模集客施設の立地を制限する特別用途地区や、非線引き都市計画区域の用途地域指定のない地域における市街化を抑制するための特定用途制限地域について、引き続き検討し、指定を進めることが望まれます。**

### c. 安全で快適な生活環境の創造

大量の降雨の頻度が増加しており、これによる大規模な土砂災害や浸水被害の発生が懸念されています。また、南海トラフ地震及びそれに伴う津波は、三重県に大きな被害を生じさせると予測されています。このような大規模自然災害に対して、現状の土地利用や施設配置、地形等の地域特性を踏まえた都市計画としての対応方針を示し、都市における災害リスクの低減を図る必要があります。とくに地震・津波に対しては、「三重県 地震・津波被害の低減に向けた都市計画指針」に基づく取組を積極的に進めていくことが必要です。

快適な生活環境づくりについては、今後の人口減少や財政状況等を踏まえ、新規整備の推進を主眼にするのではなく、積極的な既存ストックの活用を図る必要があります。今後は、持続可能な都市経営を可能にする観点から、将来都市構造を見据えながら効率的な公共施設等の維持・更新・整備を進めていく必要があります。

### d. 地域活力の維持・向上

人口減少下において、地方都市における自立的な経済・生活圏の形成が求められています。

三重県においてはこれまで「工業系土地利用誘導ゾーン」の運用による大規模工業施設の立地誘導等を図ってきましたが、計画的に実施されてきたとは言い難い状況です。これらの運用を改善する等により、地域経済の活性化と雇用促進を図っていく必要があります。その上では、リニア中央新幹線（東京・名古屋間が平成 39 年（2027 年）開業目標、その後、大阪までの全線開業予定）をはじめ、高規格幹線道路、空港・港湾等からなる広域交通体系の整備・充実に  
よる効果を活用していくことが必要です。

また、特に県の南部地域においては農林水産業や観光業等の地域資源を活かした産業が大きな比重を占めており、これら産業の振興を図るために必要な環境整備等を進めていくことが必要です。

### e. 県民が主役の地域づくり

身近な生活環境の整備や、歴史・文化、景観等の地域資源を活かしたまちづくりは、住民が主体となった活動が期待される場面であると考えられます。また、今後の都市づくりにおいて、必要な機能を確保していくためには、民間企業等の活力を取り込み、その立地誘導等を図って  
いかなければなりません。

そのため、民間企業等を含めた県民とともにまちづくりを行うための仕組みづくりに努めるとともに、関連する情報提供を積極的に行っていく必要があります。

現行の都市づくりの方向と施策の柱

美しく魅力と個性にあふれる地域づくり

- 緑豊かな都市づくり
- 歴史・文化を活かした都市づくり
- 美しい景観づくり

持続可能な地域づくり

- 地域の特性に応じた集約型都市構造の構築
- 環境負荷の少ない都市づくり
- 人が集まり交流する空間の形成

安全で快適な生活環境の創造

- 安全・安心な都市の構築
- 快適な生活環境づくり

地域活力の維持・向上

- 広域道路ネットワーク等を活かした産業集積
- 個性を活かした集客交流の推進

県民が主役の地域づくり

- 県民との協働による都市づくり

社会情勢等

社会情勢

- 人口減少・少子高齢化（生産年齢人口の減少）の進展
- 大規模自然災害の発生
- 産業のグローバル化の進展

諸計画・法整備等の動向

- コンパクト+ネットワーク
- 持続可能で豊かな国土の形成
- 立地適正化計画の制度化

- 社会資本の戦略的メンテナンス、有効活用、選択と集中

- 災害に強い国土づくり、国土強靱化
- 最大の被害想定に基づく災害対策
- 「何としても人命を守る」

現行マスタープランの検証

- ・県全体としての都計区域における都市公園の整備状況は概ね 10 m<sup>2</sup>/人（平成 21 年度末時点）であり、都市公園法施行令の標準を満たしているが、圏域による差があり、5~8 m<sup>2</sup>/人のところもある。
- ・「三重県景観計画」「熊野川流域景観計画」を策定し運用中。また、9 市がそれぞれの地域の实情に応じた景観計画を策定し運用中。
- ・3 市町において歴史まちづくり計画の認定。
- ・屋外広告物沿道景観地区として 8 地区を指定。

集約型都市構造の構築を目指した取組

- ・大規模集客施設の新規立地は、原則として広域拠点（集積型）においてのみ許容する方針⇒特別用途地区の指定（伊勢市、多気町）
- ・市街地外における市街化を抑制する方針⇒特定用途制限地域の指定（伊勢市、明和町）
- ・市町村合併を踏まえた一体的なまちづくりを行う方針⇒都市計画区域の再編（志摩都計、松阪都計）

都市の状況

【DID】

- ・伊勢志摩・東紀州は密度低下。消滅箇所あり。
- ・その他圏域は面積拡大。密度は北勢で横ばい（40 人/ha 程度）、中南勢・伊賀は低下傾向。

【拠点区域の人口】

- ・北勢、中南勢、伊賀では周辺と比較して維持又は増加傾向。将来は減少が見込まれる。
- ・伊勢志摩、東紀州では、拠点区域を含めて人口減少が進行。

【大規模小売店舗の新規立地】

- ・拠点区域で大規模小売店舗の集積が進んでいる状況にはない。
- ・店舗面積が 1 万 m<sup>2</sup> を超えるものが広域拠点区域外に立地している例がある。

- ・「三重県地球温暖化対策実行計画」のもとで各種取組を実施。しかし、市街地の拡大等による自動車交通の増大等により、CO<sub>2</sub> 排出量は全体的に増加している。
- ・三重県における輸送機関別の分担率は、自家用車が極端に増加しており、鉄道・バス等の公共交通機関が減少している。
- ・中心市街地の活性化は大きな課題。中心市街地活性化計画の認定を受けて取組を実施しているのは 2 市（伊勢市、伊賀市（2 期計画の協議中））。

- ・大雨の発生頻度が増大。土石流、地滑りなど土砂災害の発生回数は、近年において増加傾向。
- ・南海トラフ地震では地震・津波による甚大な被害が想定される。
- ・南海トラフ地震（過去最大クラス）による津波想定区域には、県総人口の約 16% が居住し、主要な公共施設等の約 18% が立地。津波による浸水が予想される広域拠点もある。
- ・県内の地域が有する様々な地理的特性により、災害リスクのあり方や、土地利用上の対応の余地等に違いが生じる。

- ・都計道路の整備率は県平均で 50% 程度。
- ・下水道普及率は向上しつつあるが、全国平均との差はまだ大きい。（污水处理人口普及率の差は小さくなってきている。）

- ・高規格道路ネットワークの早期形成を促進。⇒新名神高速道路、近畿自動車道紀勢線、熊野尾鷲道路の供用開始。
- ・産業振興戦略等のもと、企業誘致等を推進。⇒企業立地は減少傾向（直近は増加）。工業系土地利用誘導ゾーン内への工場の新規立地は 3 割程度。

- ・観光入込客数は、式年遷宮が行われた平成 25 年をピークにやや減少したものの、平成 27 年には再び増加した。

- ・参画しやすい環境整備
- ・「協創」による三重づくりの推進
- ⇒景観まちづくりプロジェクト事業等、都市計画提案制度の手続の円滑化

都市づくりの課題

- ・災害時のオープンスペース確保を含め、都市公園・緑地の整備を今後も進めることが必要。
- ・地域資源を活かした個性あるまちづくりにつなげる必要がある。

- ・都市の中心地における人口減少及び密度低下が顕著であり、生活サービスやコミュニティの維持が困難。
- ・新たに創設された立地適正化計画を具体的な実現手法の一つと想定し、集約型都市構造の形成に向けた取組を進展させる必要がある。
- ・鉄道沿線にある程度の規模を有する都市が連なる三重県の特徴を生かすことが考えられる。
- ・特別用途地区の指定や特定用途制限地域について、引き続き検討し、指定を進めることが望ましい。
- ・都市計画区域の再編について、引き続き検討を進める必要がある。

- ・大規模自然災害に対して、現状の土地利用や施設配置、地形等の地域特性を踏まえた都市計画としての対応方針を示し、都市における災害リスクの低減を図ることが必要。

- ・快適な生活環境づくりについては、今後の人口減少や財政状況等を踏まえ、将来都市構造を見据えながら効率的な公共施設等の維持・更新・整備を進めていくことが必要。

- ・広域交通体系を活用しつつ、「工業系土地利用誘導ゾーン」の運用改善等により、地域経済の活性化と雇用促進を図ることが必要。
- ・農林水産業や観光業等の振興を図るために必要な環境整備等を進める必要がある。

- ・民間企業等を含めた県民とともにまちづくりを行うための仕組み作りに努めるとともに、関連する情報提供を積極的に行っていくことが必要。

都市づくりの方向の見直しの考え方

三重県が有する豊かな自然、歴史、文化等を活かすことを都市づくりの方向として継承し、取組の継続・発展を図る。

人口減少社会という前提を踏まえ、利便性と効率性を兼ね備えた持続可能な都市の空間として、拠点とネットワークの形成を図ることを明確にする。

（「人が集まり交流する空間」については）持続可能な都市構造における拠点を形成する観点に統合する。

大規模自然災害に対する安全性を確保することに絞って、都市づくりの方向とする。

（「快適な生活環境づくり」については）財政の持続可能性確保を重視しながら「持続可能な地域づくり」のなかで実現を図ることとして統合する。

地域活力を維持・向上していくことを都市づくりの方向として基本的に継承しながら、取組について必要な見直しを行う。

県民とともに進めていくことを都市づくりの方向として継承し、取組の継続・発展を図る。





### 第3章 三重県の都市計画の基本的な考え方

#### 1 三重県の都市づくりの方向

「第2章 三重県の都市づくりにおける課題整理」において整理したように、今後の三重県における都市づくりに対しては、人口減少・少子高齢化のさらなる進展や南海トラフ地震等の大規模自然災害の発生が予測されるなかにおいても、県全体を持続可能な地域にしていくことが求められており、『豊かで活力を持ち続ける地域づくり』を目指して、現行マスタープランでの都市づくりの方向と施策の柱を、次のように見直します。

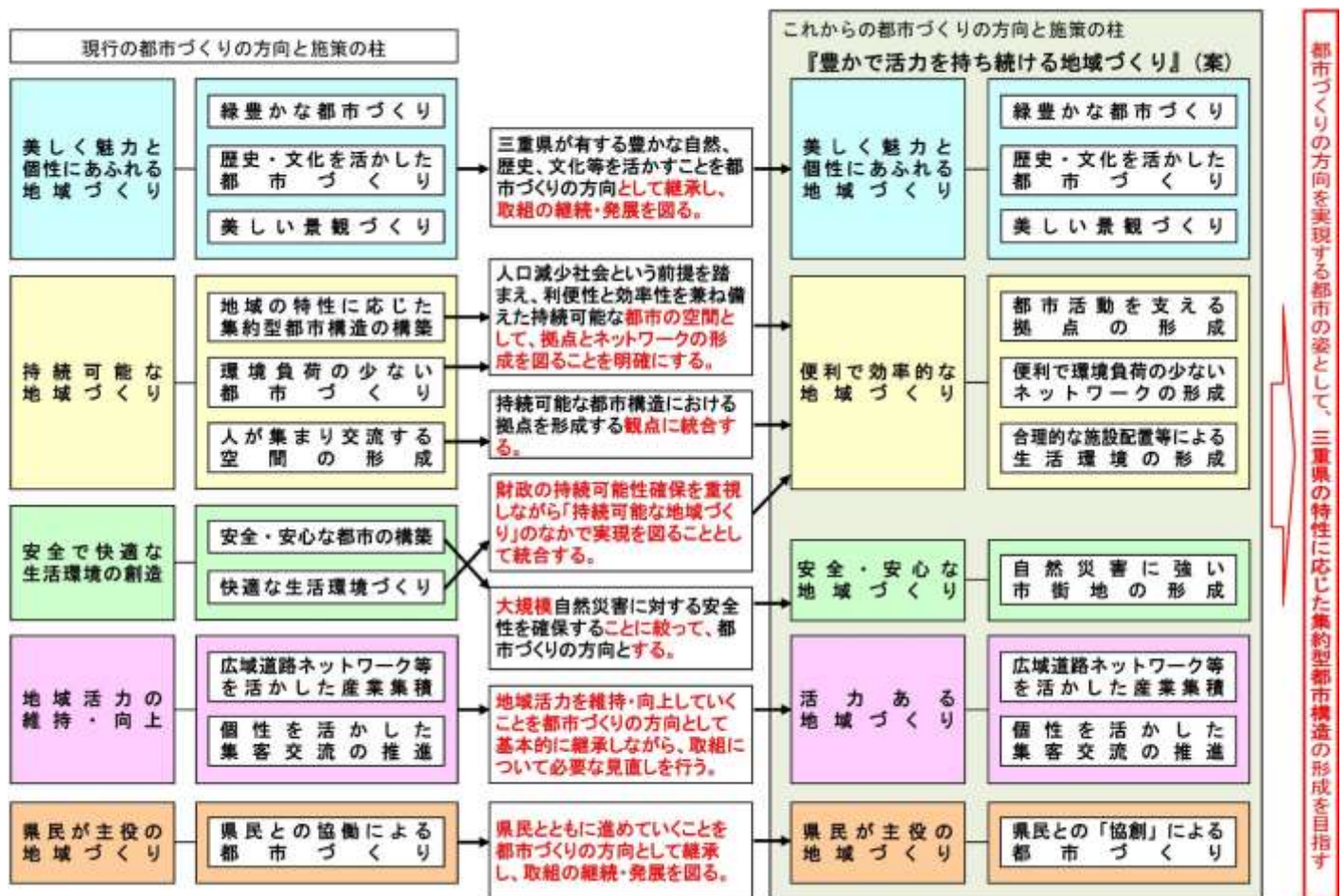


図 3-1 三重県の都市づくりの方向と施策の柱



## これからの都市づくりの方向と施策の柱

### ■ 美しく魅力と個性にあふれる地域づくり

すぐれた自然・文化・歴史などの地域資源が豊かな県土の保全・活用により、県民が誇りや愛着もてる「ふるさとづくり」を進めます。このため、三重県の特徴・個性である自然公園等の豊かな緑や歴史・文化遺産を守り、活用することに努め、生活する人にも訪れる人にも魅力あふれる美しい景観づくりに努めます。

施策の柱	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 緑豊かな都市づくり</li> <li>・ 歴史・文化を活かした都市づくり</li> <li>・ 美しい景観づくり</li> </ul>	要検討
------	--	-----

### ■ 便利で効率的な地域づくり

人口減少・少子高齢化が進展するなかでも、県民が生活サービスを楽しんで暮らすことができ、環境へ与える負荷が少なく、かつ、財政的にも持続可能な都市空間の形成を進めます。このため、医療・福祉・商業をはじめとする各種の都市機能が集積する都市の拠点と、それらを結ぶ公共交通等の交通ネットワークの形成に努めます。また、生活環境の形成にあたっては、今後の超高齢社会への対応や生活の利便性に配慮しつつ、これまでに建設されてきた公共施設等を有効に活用し、必要に応じて再編・集約を図りながら合理的な施設配置等に努めます。

施策の柱	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 都市活動を支える拠点の形成</li> <li>・ 便利で環境負荷の少ないネットワークの形成</li> <li>・ 合理的な施設配置等による生活環境の形成</li> </ul>	要検討
------	--	-----

### ■ 安全・安心な地域づくり

台風・集中豪雨等や南海トラフ地震等の大規模自然災害による被害を防止又は低減し、県民が安心して住み続けられる都市を目指し、安全・安心な生活環境の創造を進めます。このため、自然災害に際して被害を受けにくい市街地の形成に努めます。

施策の柱	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自然災害に強い市街地の形成</li> </ul>	要検討
------	---	-----

### ■ 活力ある地域づくり

経済的な持続可能性を確保するため、三重県の強みであるものづくり産業の集積や、自然・文化・歴史等の地域資源を活かしながら、地域活力の維持・向上を図ります。このため、広域道路ネットワーク等を活かした産業集積や、地域の個性を活かした集客交流の推進に努めます。

施策の柱	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 広域道路ネットワーク等を活かした産業集積</li> <li>・ 個性を活かした集客交流の推進</li> </ul>	要検討
------	--	-----

### ■ 県民が主役の地域づくり

県民の皆さんとの「協創」の取組のもと、共に住まいやまちづくりのことを考え、地域の個性を生かした魅力あるまちで、誰もが安心して、快適に暮らすことのできる都市を目指します。

施策の柱	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 県民との「協創」による都市づくり</li> </ul>	要検討
------	--	-----

## 2 三重県が目指す都市構造

三重県が有する豊かな自然・文化・歴史等を保全しながら活用し、魅力的な地域としていくためには、自然的土地利用と都市的土地利用のすみわけなど、メリハリのある土地利用を行っていく必要があります。効率的で利便性が高く環境負荷の少ないまちづくりや、地震・津波等の大規模自然災害に強いまちづくりを実現するためには、各種の都市機能が集積する拠点を交通ネットワークで結び、合理的な施設配置とすることや、災害の危険性の高い地域から低い地域への居住や都市機能の移転等を促進する必要があります。また、地域の個性に応じた産業等の振興のためには、土地を有効に活用する必要があります。

このような、人口減少・少子高齢化に対応しつつ、自然災害からの安全性が確保され、環境負荷が小さく財政的にも経済的にも持続可能な、豊かで活力ある地域を実現するための都市の姿として、三重県の特성에応じた集約型都市構造を形成することを、県民との協働・協創により目指していきます。

### 1) 目指すべき都市構造の形成に向けた変革の観点

現状の課題等を解消するためには、見直した都市づくりの方向と施策の柱を踏まえ、これまでの取組から変革する観点として、以下の3つが重要であると考えます。

- 都市経営の観点：効率的で利便性が高く、財政的に持続可能な都市構造の形成
- 都市防災の観点：大規模自然災害の被害低減に向けた都市構造の形成
- 都市活力の観点：産業振興等による地域活力の維持・向上

以下に、それぞれの変革の観点に関する基本的な考え方を示します。

#### ① 効率的で利便性が高く、財政的に持続可能な都市構造の形成に関する考え方

医療・福祉・商業等の都市機能について都市の拠点となる地域への立地誘導を図り、これらによる生活サービスが効率的に提供されるようにします。また、拠点地域の周辺や公共交通の沿線地域等への居住の誘導を図ることにより、居住者の生活利便性を確保するとともに、一定のエリアの人口密度を維持することで生活サービスやコミュニティが持続的に確保されることを目指します。

同時に、人口減少に伴う税収の減少等による財政基盤の悪化が予想されるなか、急速に進む公共施設等の老朽化に対応しつつ、一定レベルの行政サービスの維持を図ります。この上で、一定のエリアでの居住を確保することは当該エリアの地価の維持につながり、固定資産税収入の維持につながることが期待できます。また、併せて公共施設等の集約・再編を進めることで、公共施設等の維持管理・更新費の縮減を図ります。

#### ② 大規模自然災害の被害低減に向けた都市構造の形成に関する考え方

都市における土地利用及び施設配置について、市街地は災害リスクの低い場所に形成し、災害リスクが高い場所では用途（居住系、業務系、公共系等）を考慮しながら都市的土地利用の抑制等を行うことを基本的な考え方とします。

大規模自然災害による被害を低減するため、防災施設及び避難施設の整備を推進します。ただし、これらハード対策を早期に完了させることは財政的にも困難であり、また、ハード対策のみによる被害抑制には限界があります。そのため、ハード対策に組み合わせて、建築物の構造強化や土地利用の規制・誘導等のソフト対策を実施し、災害リスクの高い場所の人口や建築物の減少による被害の低減を図ります。

こうした大規模自然災害による被害低減に向けた取組は、中長期及び短期に分けて進めます。

- ・中長期の取組：概ね 50 年先（長期）に目指すべき将来像である都市のグランドデザインを検討し、その実現に向けて概ね 20 年以内（中期）に効果の発現する施策を講じます。
- ・短期の取組：中長期の取組の一方で、概ね 10 年以内（短期）の取組として、避難施設の建設など人命を守るための取組を講じます。

また、被害低減に向けた取組にあたって、災害リスクがある場所のうち、都市的土地利用の抑制や建築物の構造等の規制による被害の低減などの施策の実施を検討すべき区域が「土地利用検討区域」として設定されるよう促進します。土地利用検討区域の設定は、各都市において、地理的特性や市街地の形成状況（土地利用・施設配置等）及び想定される各種災害リスクを踏まえ、当該区域において概ね 20 年以内（中期）に必要な施策の実施可能性を判断して行うこととします。

表 3-1 災害原因種別別「土地利用検討区域」設定の考え方

災害原因の種別	「土地利用検討区域」の設定にあたって災害リスクの評価の基とする主な被害想定等
洪水	水防法に基づき国土交通大臣又は県知事が指定する洪水浸水想定区域（第 14 条第 1 項）、並びに洪水浸水想定区域図に示す洪水時家屋倒壊危険ゾーン
崖崩れ、土石流、地滑り	土砂災害防止法に基づき県知事が指定する土砂災害警戒区域（第 7 条第 1 項）及び土砂災害特別警戒区域（第 9 条第 1 項）。 <b>（土砂災害警戒区域、土砂災害特別警戒区域の指定が未了である市町においては、土砂災害危険箇所の情報をもとに検討する。）</b>
地震、津波	津波防災地域づくりに関する法律に基づく津波浸水想定（第 8 条第 1 項）

土地利用検討区域においては、各都市が目指す将来像の実現に向け、実施すべき施策を検討します。この際、集約型都市構造を形成する観点も踏まえ、以下について検討を行うこととします。

- ・土地利用検討区域外への対象施設の移転等の実現可能性
- ・土地利用検討区域外の既成市街地での、当該対象施設の集約の実現可能性

なお、地震・津波に関しては「三重県 地震・津波被害の低減に向けた都市計画指針」を策定しており、これに基づき、各都市計画区域のマスタープランにおいて、地震・津波被害の低減に向けた都市計画の方針を示します。

### ③ 産業振興等による地域活力の維持・向上に関する考え方

経済的な持続可能性を確保するため、新たに構築が進む広域交通ネットワーク等や既存工業用地の産業集積等を考慮して、都市計画区域マスタープランに位置づける「工業系土地利用誘導ゾーン」の運用等の見直しを実施し、企業誘致の促進を図ります。

また、上記(2)の「土地利用検討区域」など、災害リスクへの対応に伴い生じる施設等の移転跡地を活用した企業誘致について検討します。

こうした企業誘致は、立地を検討する企業への積極的な情報提供や、立地にあたっての迅速な手続の実施及び優遇措置の適用等を含め、県の関連部局及び市町が連携し、進めます。

なお、例えば道路等の都市基盤整備が不十分な既存市街地外の地域において、工場立地等が散発的に進むなど、都市経営の持続可能性が大きく損なわれる事態は避けなければなりません。既存市街地外における新たな工業系産業用地等の開発は、原則としてできるだけまとまった範囲・規模で、既存の都市基盤を活かしながら、計画的に実施されるよう留意します。

この他、景観法や、都市計画法の手法による緑地・景観の保全・形成に努め、豊かな自然環境等の地域資源を活かした観光産業の振興を図ります。

## 2) 特性に応じた集約型都市構造の形成に関する考え方

集約型都市構造とは、医療・福祉施設、商業施設等の都市機能がアクセス性の高い交通結節点等の拠点にまとまって立地し、その周辺に住居がまとまって立地し、高齢者をはじめとする住民が公共交通によりこれらの都市機能に容易にアクセスできるような「コンパクトシティ・プラス・ネットワーク」の考えに基づく都市構造をいいます。

三重県における公共交通網の整備状況や、現状の日常生活や都市活動での利用状況から、ある程度自動車交通に依存した都市構造とならざるを得ないと考えられますが、誰もが住みやすく環境にもやさしい都市の形成に向け、できるだけ公共交通が利用できる場所に拠点を定めます。

以下に、都市構造形成のための主要な要素として、①拠点、②ネットワーク、③市街地の範囲についての基本的な考え方を示します。

### ① 拠点

各圏域において都市の拠点を形成し、都市における適正な機能配置や、メリハリのある土地利用の誘導を図ります。

圏域における都市生活・活動の中心的な役割を担う区域を広域拠点と位置づけます。広域拠点は、ある程度の商業・業務機能等が集積している地域のなかで、市町を越えた広域から多くの人やモノが集まりやすい公共交通の結節点等を中心に設定し、大規模集客施設を含む多様な都市機能の立地の誘導を図ることとします。

### ② ネットワーク

交通ネットワークについては、高規格道路のネットワーク化に加え、主要な鉄道駅に接続する自動車交通、バス交通、自転車・徒歩交通等の適切な連携を促進するなど、交通結節機能を充実させることで、総合交通体系の構築を目指します。

### ③ 市街地の範囲

市街地の範囲はいたずらに拡大せず、既存市街地の範囲内とすることを原則とします。ただし、計画的に行われる以下の場合、新たな市街地の形成を許容します。

- ・大規模自然災害への対応のために、新たな市街地が必要である場合
- ・地域の経済的な持続可能性のため、新たな工業系産業用地等を確保することが必要である場合



### 3 都市計画区域マスタープランについて

次期都市計画区域マスタープラン策定に際しての基本的な考え方等について示します。

#### 1) 計画の構成

「第2章\_4\_1)圏域の設定について」で整理したように、三重県の状況を考慮すると、都市の将来像や方針等は、生活等の結びつきを考慮して設定する圏域ごとに示す必要があります。そのため、次期の都市計画区域マスタープランでは、広域検討部分として圏域全体の将来像を示す「圏域マスタープラン」及び区域ごとの検討部分である「区域マスタープラン」により構成することとします。

#### 【圏域マスタープラン】

基本方針で設定した圏域ごとに、概ね20年後の将来都市像を展望し、現状と計画、都市計画が担うべき課題、理念と目標などを「都市計画の目標」として明らかにします。この「圏域マスタープラン」は、各都市計画区域マスタープランの第1章で示します。

#### 【区域マスタープラン】

圏域マスタープランにおいて示す都市づくりの目標に即した都市計画区域ごとの具体的な土地利用規制や主要な都市計画の決定方針を明らかにします。これを各都市計画区域マスタープランの第2章及び第3章に示します。

#### 都市計画区域マスタープラン「都市計画区域の整備、開発及び保全の方針」

##### 【圏域マスタープラン】

##### 第1章 都市計画の目標

1. 圏域・都市計画区域の現状と計画
2. 圏域・都市計画区域において都市計画が担うべき中心課題
3. 都市計画の理念と目標
4. 圏域・都市計画区域の将来都市構造図

理念及び目標の具体像として、拠点、連携軸、土地利用の用途別のゾーンからなる将来の都市構造図を示す。

##### 【区域マスタープラン】

##### 第2章 土地利用規制の基本方針

区域区分の決定の有無及び区域区分を定める場合の方針を示す。

##### 第3章 主要な都市計画の決定方針

1. 土地利用に関する主要な都市計画の決定方針  
区域区分の有無に応じて、主要用途の配置方針等の土地利用の方針を示す。
2. 都市施設の整備に関する主要な都市計画の決定方針  
交通施設、下水道及び河川、その他主要な都市施設について、基本方針、施設の配置方針、整備目標を示す。
3. 市街地開発事業に関する主要な都市計画の決定方針  
土地区画整理事業等の市街地開発事業について、決定方針、整備の目標を示す。
4. 自然的環境の整備又は保全に関する都市計画の決定方針  
公園・緑地に関して、基本方針、配置方針、確保目標を示す。
5. 地域の特性に応じて定めるべき事項  
上記のほか、地域の特性に応じた必要な項目について基本方針や施策の概要を示す。特に、「都市防災」に関する基本方針、施策の概要を示す。

図3-2 都市計画区域マスタープランの構成

## 2) 都市計画区域に関する考え方

### ① 都市計画区域の再編

都市計画区域については、「1市町は同一の都市計画区域」とすることを基本的な方針とします。下記に示す判断基準のもと、関係市町のまちづくりの方針を踏まえて継続して協議しながら、長期的な視点で検討を進めます。

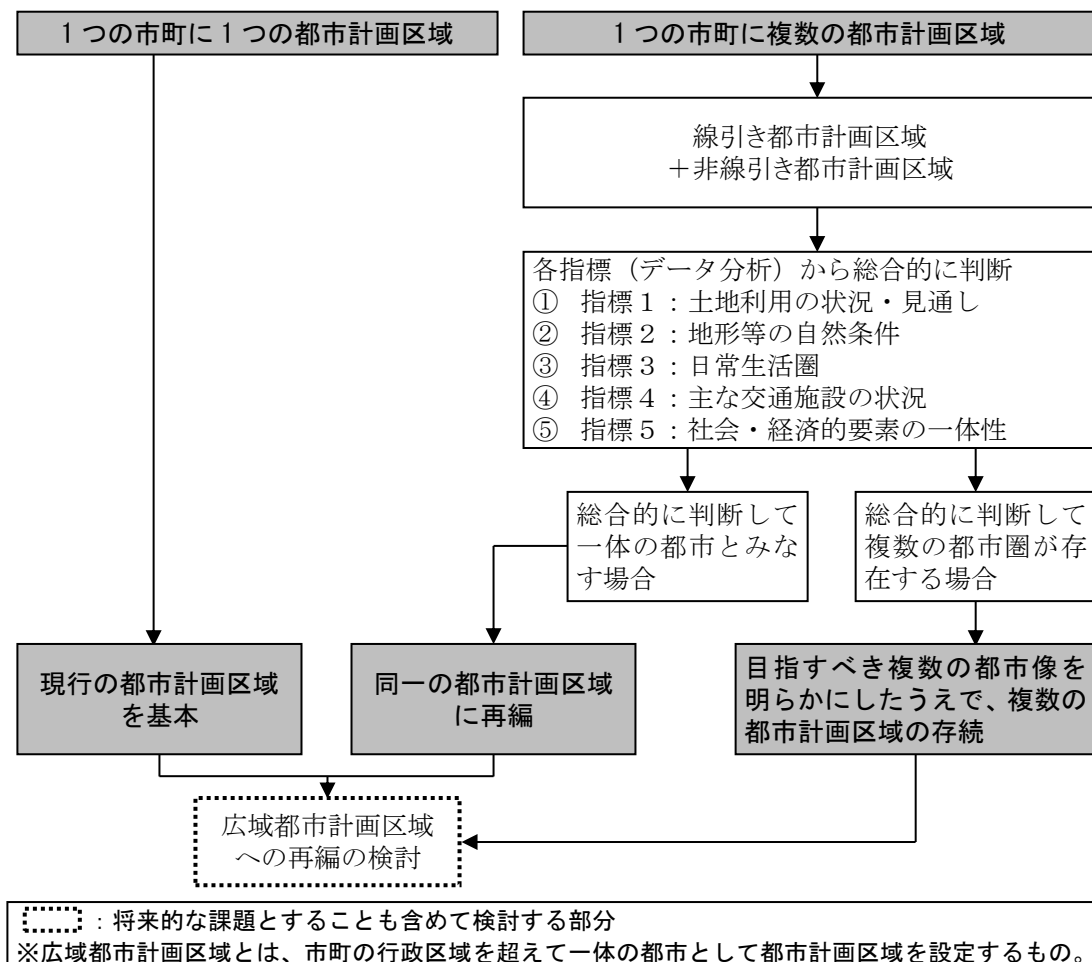


図 3-3 区域再編の判断基準

## ② 都市計画区域の拡大等の見直し方針

現行の都市計画区域に隣接する都市計画区域外に位置し、潜在的に開発の可能性がある区域については、原則として、都市計画区域への編入の必要性について検討します。

検討の結果、積極的に都市基盤を整えるまでのニーズはなく、都市計画区域への編入までは要しないと判断した場合であっても、大規模集客施設等の立地などにより、広域的都市構造に影響を及ぼす恐れのある区域については、準都市計画区域の指定や、建築基準法第 68 条の 9 の適用、各市町の条例等による対応を検討することとします。

なお、都市計画区域の拡大については、拡大の対象となる区域における都市計画上の取組を既存の都市計画区域と一体で行うことが、目指す都市構造を実現するために必要かどうかを併せて検討します。

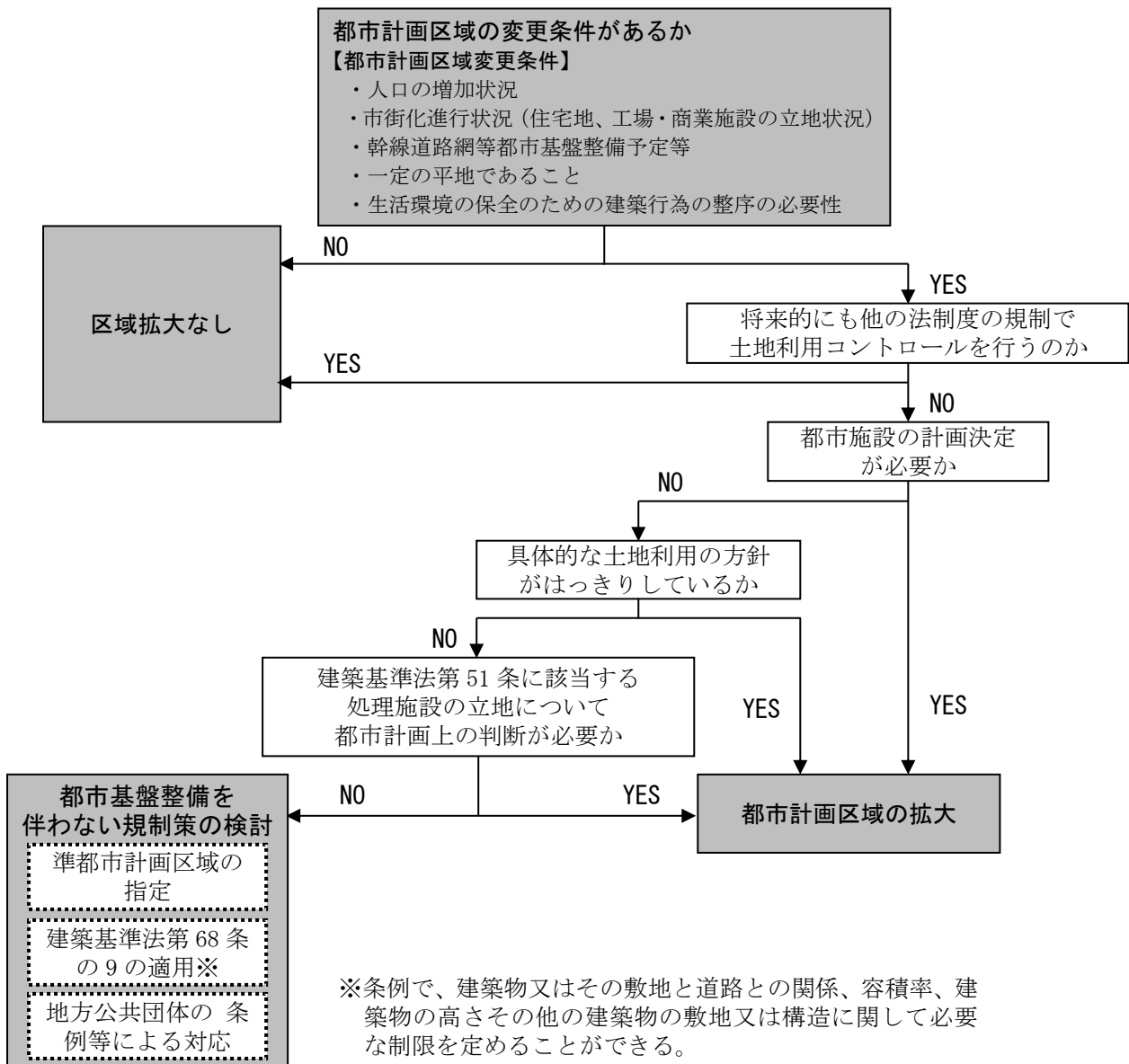


図 3-4 都市計画区域の変更に関する検討フロー

### 3) 都市計画区域マスタープランの個別項目の考え方

以下に、都市計画区域マスタープランに記載すべき個別項目の基本的な考え方を示します。

#### I 都市計画の目標

当該都市計画区域が属する圏域における都市計画の理念・目標と、将来の都市構造を示します。この際、隣接する他の圏域や都市計画区域外の現況及び今後の見通しを踏まえ、当該圏域・都市計画区域の広域的な位置付けについて明らかにします。

#### II 区域区分に関する方針

##### ① 区域区分の状況

三重県における区域区分の状況は以下のとおりです。都市計画法第7条第1項の規定により区域区分を定める桑名都市計画区域及び四日市都市計画区域を含め、6都市計画区域で区域区分を適用しています。

表 3-2 三重県における区域区分の状況

大都市圏	都市計画区域名称	当初線引年月日	都計区域面積 (km <sup>2</sup> )	都計区域人口 (千人)	構成市町
中部圏 都市整備区域	桑名	S45.8.31	171	183	桑名市、いなべ市、木曾岬町、東員町
	四日市	S45.8.31	252	364	四日市市、朝日町、川越町、菰野町*
中部圏 都市開発区域	鈴鹿	S46.12.28	169	201	鈴鹿市
	津	S45.8.31	150	219	津市
	松阪	S47.12.26	174	154	松阪市
近畿圏 都市開発区域	上野	H4.3.31	195	60	伊賀市
計	6都計区域		1,112	1,180	12市町

注) 平成26年3月31日現在(面積及び人口は平成26年都市計画現況調査(国土交通省)による)。

※菰野町は、中部圏都市整備区域には指定されていません。

##### ② 区域区分適用の考え方

三重県の特性に応じた集約型都市構造の形成に向けた土地利用コントロールを行うための基本的な手段として、区域区分制度を位置づけます。

区域区分を現在適用している都市計画区域については原則として区域区分を維持することにより、広域拠点等において都市機能の維持や立地誘導を図るとともに、幹線道路の整備等に伴う市街地の拡散を抑制しつつ、区域内の自然環境を適正に整備又は保全します。

現状で区域区分を適用していない都市計画区域については、今後の急激な市街地の拡大や保全すべき自然環境等の阻害が見込まれない場合には区域区分を適用せず、用途地域や特定用途制限地域の指定、立地適正化計画の運用、地区計画の適用、開発許可制度の運用等による土地利用の規制・誘導によって無秩序な市街化を抑制する方針を明らかにします。

なお、津市及びいなべ市においては、線引き都市計画区域と非線引き都市計画区域が混在しているため、「1市町は同一の都市計画区域」とする基本方針にしたがい、地域の実情等を考慮しながら、引き続き区域区分の適用の適否について検討します。



### ③ 市街化区域の規模の考え方

市街化区域の規模の設定は、人口フレーム方式を基本とします。市街化区域内の住宅用地の規模を検討するにあたっては、将来における人口減少傾向のほか、世帯人員の低下傾向等についても考慮して、市街地における人口密度の構成を的確に想定することとします。

また、産業振興等による工業系産業用地等を確保する必要がある場合は、地域の状況を勘案して、工業用地フレームを設定することを検討します。

なお、大規模自然災害の被害低減に向けた都市構造の形成に向けて、「土地利用検討区域」内の住宅や公共施設等の移転先を確保するために必要な場合は、人口フレーム方式以外で市街化区域編入手法について検討します。

## III 主要な都市計画の決定方針

### i 土地利用に関する方針

#### ① 区域別の土地利用の基本的な考え方

##### a. 市街化区域

都市機能の集積を図るべき広域拠点等の区域においては、景観や生活環境に配慮しつつ、当該拠点区域の目指す市街地像に応じ、原則として密度の高い高度な土地の利用を図ります。拠点以外の区域については、高さや容積率、建ぺい率などを適切にコントロールし、緑や周辺の景観と調和した空間を創出します。

市街化区域内にある集団的な農地や山林等は、都市農業の場や市街地における貴重な緑・オープンスペースになりうる土地として積極的に都市計画上の位置づけを与え、適切に保全・活用します。

三重県の特性に応じた集約型都市構造の形成に向け、市町の立地適正化計画による取組を促進します。立地適正化計画に定める居住誘導区域への居住、都市機能誘導区域への誘導施設の立地誘導を図る一方で、市街化区域内で居住誘導区域から外れた区域については、必要な場合には、居住調整地域の指定等による土地利用の抑制方策をとることも検討することとします。

##### b. 市街化調整区域

市街化調整区域は市街化を抑制する区域であり、引き続き自然環境や農林漁業との調和・共存を基本に土地利用を図ります。

一方、人口減少傾向が今後より強まるなかでも、農林漁業を支える既存集落等が役割を守り、歴史・文化など地域の個性・多様性を維持していく必要があります。そのため、既存集落等において、地域の状況に応じて一定の条件に沿った開発行為や建築行為については許容し、地域の活力や生活環境を維持します。

- ・市街化調整区域全体の保全・整備に関する理念・計画を、都市計画区域マスタープランで提示します。
- ・これにしたいがい、自然環境や農林漁業と調和・共存を基本に、開発を行わず自然的環境、農地・林地等として保全すべき区域を明示します。
- ・個性ある地域として活力を創出していくべき既存集落等の区域について、必要な場合には、地区計画等の活用により一定の開発が許容されることを明らかにすることで、このような区域での計画的なまちづくりを促進します。

##### c. 非線引き都市計画区域

都市計画運用指針において「用途地域が定められていない地域においては当該地域の市街化の促進につながるような都市施設を都市計画に定めることは望ましくない」とされているように、本来、用途地域が定められていない地域（以下「白地地域」という。）は市街化することを想定していません。非線引き都市計画区域において、都市的土地利用を促進し市街地として

の土地利用を図る区域には、用途の混在等を防止しつつ望ましい市街地像を実現するため、用途地域を定めることを原則とします。

- ・都市計画区域マスタープランで、都市的土地利用を行うゾーン、農林漁業を営むゾーン及び自然環境を保全するゾーンを示します。
- ・都市的土地利用を促進し市街地としての土地利用を図る区域には、原則として用途地域を定めます。さらに地区計画などを積極的に活用することで良好な都市環境の保全・創出を図ります。
- ・白地地域については市街化を抑制します。そのため、他法令による土地利用の規制状況を踏まえ、必要に応じて特定用途制限地域や地区計画を活用します。

ただし、各都市計画区域における土地利用のコントロール手法については、当該都市計画区域における宅地開発の動向や、人口減少・高齢化の進行の程度等の地域の実情を考慮した上で検討することとします。

都市機能の集積を図るべき広域拠点等の区域においては、景観や生活環境に配慮しつつ、当該拠点区域の目指す市街地像に応じ、原則として密度の高い高度な土地の利用を図ります。拠点以外の区域については、高さや容積率、建ぺい率などを適切にコントロールし、緑や周辺の景観と調和した空間を創出します。

三重県の特性に応じた集約型都市構造の形成に向け、立地適正化計画による市町の取組を促進します。立地適正化計画に定める居住誘導区域・都市機能誘導区域への居住や誘導施設の立地誘導を図る一方で、市街地等のうち居住誘導区域から外れた区域について、必要な場合には、居住調整地域の指定等による土地利用の抑制方策をとることも検討することとします。

#### d. 都市計画区域外

都市計画区域マスタープランは、都市計画区域外の区域を含めた圏域全体を対象として目指す都市構造を示した上で、都市計画区域内に関する個別の方針を定めます。

市町においては、圏域の将来都市構造を踏まえながら、都市計画区域外を含めたまちづくりが検討されることが望まれます。

立地適正化計画を策定する場合は都市計画区域内が計画の対象となりその区域外に居住誘導区域等を設定することはできませんが、既存集落等については「小さな拠点」等として位置づけ、日常生活の利便性の確保等を図っていくことが考えられます。

## ② 大規模自然災害のリスクのある区域の土地利用の考え方

施設の用途を居住系、業務系及び公共系に大別し、大規模自然災害のリスクへの対応の観点からの用途別の施設配置の基本的な考え方を以下に示します。

### a. 居住系：住宅・医療福祉施設等

- ・住宅・医療福祉施設等については、災害リスクが低い場所にある状態を基本とします。
- ・災害リスクの低い場所への移転等が困難な場合や時間を要する場合は、建築物の構造強化や避難の安全性を確保するための対策を講じます。
- ・配置する場所の設定にあたっては、日常生活の利便性にも配慮します。

### b. 業務系：事務所・店舗・工場等、居住を伴わない業務系の施設

- ・事務所・店舗・工場等、居住を伴わない業務系の施設については、避難の安全性を確保した上で、災害リスクの観点だけではなく、産業活動の機能性や地域産業の維持向上に配慮し、配置すべき場所を設定します。
- ・二次災害をもたらすおそれのある燃料や薬品等の保管・配置・管理等に十分配慮し、災害発生時における流出防止等の対策を講じます。

### c. 公共系：庁舎・学校・公民館等の避難所及び地域防災拠点となる施設

- ・災害発生時に避難所や地域防災拠点となる庁舎・学校・公民館等のうち、応急対策活動を行う拠点となる公共施設（縣市町の庁舎、消防署・警察署等）は、災害リスクが極めて低い場所にある状態を基本とします。
- ・災害リスクの極めて低い場所への移転等が困難な場合や時間を要する場合は、大規模自然災害発生時にもその機能が確保されるよう災害リスクが極めて低い場所に代替施設等を確保します。
- ・学校及び地区公民館等は、災害リスクが低い場所にある状態を基本とします。
- ・災害リスクの低い場所への移転等が困難な場合や時間を要する場合は、建築物の構造強化や避難の安全を確保するための対策を講じます。
- ・配置する場所の設定にあたっては、日常生活の利便性にも配慮します。

### ③ 工業系土地利用に関する考え方

都市計画区域マスタープランにおいて、地域活力の維持・向上を図るため、周辺の環境に配慮しつつ、新たな産業の立地・誘導や既存産業の維持を図る「工業系用途地域」、「用途地域外の一団の既設工業用地」及び「用途地域外における工業系土地利用構想・計画地」を工業系土地利用と位置づけます。この「工業系土地利用」のなかから、一定の基準により「工業系土地利用誘導ゾーン」を選定し、同区域への大規模工業施設の立地を促進します。立地促進にあたっては、県の関係部局及び市町と連携した取組に努めます。

工業系土地利用誘導ゾーンにおいて立地・誘導を図る具体的な業種等の選定については、市町主体で行います。また、工業系土地利用誘導ゾーン以外の区域で市町マスタープランにおいて工業系土地利用の位置づけがある区域に関して、市町が主体となって都市計画の変更を行おうとする場合、県は、「協議」「同意」の手続きのなかで、都市計画区域マスタープランの目標に即した判断を行います。

既存の市街地外に位置する工業系土地利用誘導ゾーンについては、必要に応じて都市基盤の整備を進め、工業系用途地域の指定を検討します。これが市街化調整区域にある場合には、市街化区域へ編入することを原則としますが、困難な場合には地区計画制度を適用して必要な整備を行います。

## ii 都市施設整備に関する方針

### ① 交通施設の整備に関する基本的な考え方

主要な鉄道駅周辺等を中心に自動車交通、鉄道、バス交通、自転車・徒歩交通等の適切な連携を促進するなど、交通結節機能を充実させることで、総合交通体系の構築を目指します。

#### a. 道路

三重県における現状として自動車交通は人・モノの移動の主要な手段であり、引き続き幹線道路網を充実することが必要です。

中部圏や近畿圏、県内の他圏域等と連携する広域幹線道路網の維持・充実に努め、各 IC やそれらへのアクセス道路を含めた幹線道路網の交通処理・空間形成・景観形成等の諸機能の維持・増進が必要です。

道路の整備にあたっては、拠点間の円滑な連携を効率的に実現するため、既存ストックを有効に活用しながら交通需要に対応するとともに、安全性や沿道環境を考慮し、階層的な道路ネットワークの構築を進めることが必要です。

また、緊急輸送道路については、大規模自然災害時での機能を確保するため、道路自体の防災性の維持・強化の他、多重性の確保が必要です。

以上の観点を踏まえ必要となる、都市計画道路の着実な整備を図ります。また、社会・経済

情勢や住民の意向等を踏まえながら、道路の機能を明確にしたうえで、必要に応じた道路計画の見直しを進めます。

#### **b. 公共交通**

超高齢社会への対応や環境負荷の低減の観点から、公共交通の重要性はさらに高まっており、より多くの人々が公共交通で移動することができ、また、それにより公共交通を維持することができる都市構造の形成が必要です。

### **② 下水道及び河川の整備に関する基本的な考え方**

生活環境の改善と河川等の水質の保全を図るため、既存施設を適正に維持するとともに、必要に応じて事業区域の見直しや農業集落排水事業等と連携を図りながら下水道等の整備を引き続き進めるなど、地域の状況に応じた適切な生活排水処理を促進することが必要です。

### **③ その他、都市施設の整備に関する基本的な考え方**

都市の防災性向上に資する施設（例えば緊急輸送道路に位置づけられる道路をはじめ、河川、防水・防潮の施設等）の整備にあたり、土地の確保等のために必要な場合には、それら施設を都市施設として都市計画決定することも検討しながら、着実な整備を図ります。

想定される津波災害の被害低減のために、土地利用検討区域から重要な公共施設の移転を図る場合等は、必要に応じて一団地の津波防災拠点市街地形成施設を整備することにより、津波発生時における都市機能の確保を図ります。

立地適正化計画に定める都市機能誘導施設等、当該都市として確保することが必要な施設（例えば教育文化施設、社会福祉施設等）の整備にあたり、土地の確保が必要な場合には、それらを都市施設として都市計画決定し、着実な整備を図ります。

### **iii 市街地開発事業等に関する方針**

都市の拠点形成や、交通ネットワークの形成、良好な居住環境の形成に向けた市街地の整備を進めます。

主要な鉄道駅周辺、あるいは立地適正化計画による都市機能誘導区域などの都市の拠点となる地域において、道路等の都市基盤を整備し、土地の高度利用等による都市機能の集積を図る場合は、必要に応じ、土地区画整理事業や市街地再開発事業等の実施を検討します。また、拠点地域の周辺や公共交通の沿線地域等において良好な住宅地の形成を図る場合は、必要に応じ、土地区画整理事業等の実施を検討します。

生活道路が狭隘である、幹線道路が未整備である等の問題を抱えている低層・高密な市街地においては、地域コミュニティに配慮しながら、面的整備にあわせて必要な道路、公園等の整備を進め、安全性の高い市街地の形成を図ります。

歴史資産等を有する地区においては、既存の住宅地における居住環境の維持・向上に努めるとともに、歴史的まち並みの保全・形成を図るため、必要に応じ地域地区や地区計画を検討します。

### **iv 自然的環境の整備又は保全に関する方針**

美しく魅力と個性にあふれる地域づくりの実現にむけ、山林や里山、農地、河川等の自然環境の保全や、公園・緑地の整備等を進めます。また、防災機能を有する「自然環境保全地域」や保安林をはじめ、丘陵地の樹林地、平野部の農地、河川・海岸沿いの緑地等についても、適切に整備・保全を行うことが必要です。

このため、他法令による土地利用規制との整合に留意しながら、適切な地域地区を指定し保全を図ります。

#### v 地域の特性に応じて定めるべき事項

都市計画区域マスタープランには、上記までに関する方針の他に、地域の特性に応じた必要な事項について、基本方針や施策の概要を示します。特に、対応の必要性が高まっている都市防災に関しては、その基本方針や施策の概要を示すこととします。

##### ① 都市防災に関する方針

想定される風水害や土砂災害、地震・津波災害に対して、地域の地理的特性及び人口集積、市街地の形成状況、産業構造等の現状と将来の見通しに応じて、都市構造の再編を検討します。

##### ② 自然環境・広域交流に関する方針

豊かな自然環境をはじめとする地域資源を生かした魅力ある地域づくりを進めます。これらの地域資源をもとにした集客交流を促進し、地域の活力の維持・向上につなげるため、必要なアクセス道路等の交通施設や、観光交流のための施設等の整備、周辺部も含めた広域的な交流拠点としてふさわしい景観の維持・形成等に努めます。

##### ③ 歴史・文化・景観に関する方針

県内に豊富に存在する貴重な歴史・文化遺産や美しい景観については、地区計画や建築協定などの適用、景観法、景観条例等に基づく規制・誘導等による保全を図り、地域のポテンシャルを高めていきます。